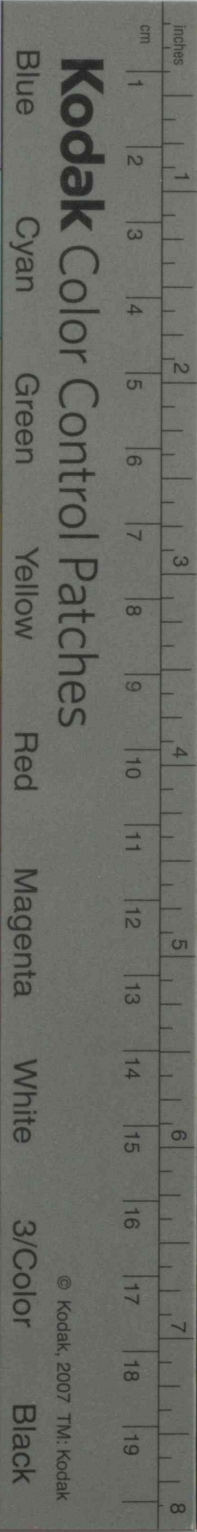


中國文教科書

卷十

3759  
Y019  
資料室



41743

教科書文庫

4
810
41-1943
200030 2047

C  
Y  
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

© Kodak, 2007 TM: Kodak



中國文教科書 卷十

目次

一	明治維新	互理章三郎	一
二	英雄と偉人	土田杏村	三
三	世界の四聖	高山樗牛	三〇
四	上古の文學		三三
五	倭建の命	〔古事記〕	四〇
六	萬葉集鈔	〔萬葉集〕	五三
七	抒情詩としての短歌	土屋文明	六〇

八	深穩……………	阿部次郎	七
九	幻住庵の記……………	松尾芭蕉	七
一〇	宇治行……………	谷口蕪村	全
一一	俳句の詩形……………	水原秋櫻子	全
一二	現代の文學……………		全
一三	秋風の歌……………	島崎藤村	一七
一四	草枕……………	夏目漱石	二三
一五	元祿の三文豪……………	藤井紫影	一六
一六	奈良の庭竈……………	井原西鶴	一〇
一七	粽一把に錢五百……………	近松門左衛門	一五
一八	枕草子鈔……………	清少納言	一四

	春は曙……………		一四
	にくきもの……………		一四
一九	須磨の浦波……………	紫式部	一四
二〇	國文學の精神……………	久松潜一	一五

目次 終



中國文教科書 卷十

互理章三郎  
倫理學者

教育家  
元東京高等師範  
學校教授  
明治六年(一五三)  
兵庫縣生

一 明治維新

互理章三郎

江戸時代の封建制度は、至つてよく整つたものであつたけれども、對外的には鎖國の政策を持し、主として國內的に種々の勢力が相牽制して、平和秩序を維持するやうに出來てゐた。各藩はそれ／＼特殊の政治を施し、教育を行ひ、嚴に兵力を備へて相對立してゐたから、陽に平和の交をしてゐても、何時敵國になるか知れぬといふ覺悟をなし、一朝大變亂が起れば、戰國の昔に復るといつたやうな形勢であつた。それで消極的に相互の力を殺

ぐことが多くなり、積極的に全國民の力を綜合し統一してこれを進展せしめることに大いなる缺陷があつた。邊海が平穩無事である時は、それでも國內の秩序を維持することが出来たが、對外的に國家の統一と獨立とを全うし、國運の發展を圖ることは、頗る困難なる事情の下にあつた。然るに當時西洋諸國民の勢力は着々として東洋南洋を風靡し、殊に英國は印度を取つて、その領有となし、支那を破つて、地を割き和を媾せしめ、進んで我が邊海に迫るに至つた。露國は西比利亞より南下して我が國を窺ひ、米國は又斷乎として開國を要求するに至つた。事は我が國の安危興亡に關するので、朝廷ではいたく宸襟を惱まし給ひ、國民の愛國心も上下を通じて勃然として起り、どうかして外侮を禦ぎ我が國の獨立を完全ならしめようとした。

これが爲に先づ必要とせられたのは、我が國の統一を完くし、その全實力を舉げて外國に當るといふことであつた。かくて我が國の統一を完全にするには、公武の二元的中心が對立してゐてはならぬ。又國家の安危興亡に關する大事件を、従前の如く幕府の專斷に任せて置くことも出来ない。かくて公武合體の運動も行はれたが、かゝる妥協的な不徹底な處置によつては、國家の統一を完全ならしめることは出来ない、どうしても我が國全體が、その本來の絶對の中心たる皇室に一元的に統合されなければならぬ。こゝに於て武家の幕府は政權を朝廷に返上し、皇室中心に政治上の再組織が行はれることとなつた。それが即ち明治の維新である。

江戸時代はその封建制度によつて、諸藩が割據的に對立しながら

らも、多年の泰平によつて、海陸の交通も開け、産業も發達し、經濟上から全國的の統一を促してゐるものがあり、文教の興隆した結果として國民の自覺も實力も進み、武士と稱する特權階級の支配のみでは解決の出來ない問題が多くなり、時勢は精神的にも社會的にも國民生活の再組織を要求してゐた。そして當時明らかになされてゐた大義名分の觀念から、その再組織の中心は固より皇室に在るべきものとされてゐたのである。明治維新はかくして出現した。

要するに明治維新は皇國の組織的肇造の格段なる新發展を遂げたものといふべきである。そしてその維新の精神は、畏くも明治天皇が、明治元年三月十四日親しく南殿に出御して天地の神祇を祀らせ給ひ、公卿諸侯を會して遍く天下に宣明せさせ給

五箇條御誓文

明治元年(三三〇)三月明治天皇親しく紫宸殿に臨御して天神地祇を祀り公卿諸侯を會し新政の基準として天下に宣明し給うた五箇條

- うた新政の基本的準則たる左の五箇條御誓文に極めて明らか  
に宣揚されてゐる。
- 御 誓 文
- 一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ
  - 一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
  - 一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス
  - 一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
  - 一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ 皇基ヲ振起スヘシ
- 我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ 朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

年 號 月 日 御 諱

この五箇條御誓文にあらはれてゐる明治維新の精神において最も主要なるは、我が國家をして皇室を中心とする全國民の國家たらしめよう、即ち皇國をして皇國の皇國たらしめようとせられた事である。公卿とか武士とか、或一部の特權階級の國家たらしめず、全國民の奉仕する皇國たらしめようとせられたことである。「廣ク會議を興シ萬機公論ニ決スヘシ」と仰せられたのもこれがためである、「上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ」と仰せられたのもこれがためである。殊に「官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス」とあつて、その「庶民ニ至ル迄」とあるところに、その精神が最も高調されてゐる。これを個人主義的な自由平等の意義に解し、その庶民

の志を、個人の利益を本位とする意欲と解するならば、それは甚だしい誤である。庶民の志とは即ち庶民報國の志である。それは前條の「上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ」とあるにても明らかであり、又この御誓文の聖解ともいふべき同時の御宸翰布達の辭に、

「末々ノ者ニ至ル迄敬承シ奉リ心得違無之 國家ノ爲ニ精々其分ヲ盡スヘキ事」

とあるにて最も明らかである。即ち明治維新は、全國民が各、その分に應じて報國の志を遂げ得るやうに、國民生活を再組織されたものである。

又御誓文の第五條に「智識ヲ世界ニ求メ大ニ 皇基ヲ振起スヘシ」とあつて、文化の皇國的統一といふ大精神が明らかにせられ

てある。智識を世界に求める目的は、大いに皇基を振作興起せしめることに存するのであるから、當然我が國固有の皇道を本とし、宇内の文化を採擇し、融合し、同化し、統一し、以て世界的規模を有する皇國的文化を組織的に創造するといふことになる。單に學問のための學問であるとか、學問に國境がないとかいつて、國體を忘れ、國家を忘れ、外國文化の奴隸となり、漠然としてその歸趣する所を失ふといつたやうなことは、舊來の陋習を破つて天地の公道に基づき、國を開いて萬邦と交を結び、進んで智識を世界に求めようとせられた明治維新の精神ではない。

當時の御宸翰は五箇條御誓文とともに、明治維新以來、現代より將來にかけての指導精神として仰ぐべきものであり、皇國興隆の意氣、潑刺として旺盛なるものがあるから、謹んでこゝに掲記し奉る。

御宸翰

朕幼弱ヲ以テ粹ニ大統ヲ紹キ爾來何ヲ以テ萬國ニ對立シ列祖ニ事ヘ奉ランヤト朝夕恐懼ニ堪サル也竊ニ考ルニ中葉朝政衰テヨリ武家權ヲ專ラニシ表ニハ朝廷ヲ推尊シテ實ハ敬シテ是ヲ遠ケ億兆ノ父母トシテ絶テ赤子ノ情ヲ知ル事能サルヤウ計リナシ遂ニ億兆ノ君タルモ唯名ノミニ成リ果其力爲ニ今日朝廷ノ尊重ハ古ニ倍セシカ如クニテ朝威ハ倍衰ヘ上下相離ル、事霄壤ノ如シカ、ル形勢ニテ何ヲ以テ天下ニ君臨センヤ今般朝政一新ノ時ニ膺リ天下億兆一人モ其處ヲ得サル時ハ皆朕カ罪ナレハ今日ノ事朕自身骨ヲ勞シ心志ヲ苦メ艱難ノ先ニ立古列祖ノ盡サセ給ヒシ

御宸翰  
明治元年三月十四日五箇條御誓文と同時に公布せし給うた御



蹤ヲ履ミ治蹟ヲ勤メテコソ始テ 天職ヲ奉シテ億兆ノ君タ  
 ル所ニ背カサルヘシ往昔 列祖萬機ヲ親ラシ不臣ノモノア  
 レハ自ラ將トシテコレヲ征シ玉ヒ 朝廷ノ政總テ簡易ニシ  
 テ如此尊重ナラサルユヘ君臣相親シミテ上下相愛シ德澤天  
 下ニ洽ク國威海外ニ輝キシナリ然ルニ近來宇内大ニ開ケ各  
 國四方ニ相雄飛スルノ時ニ當リ獨我邦ノミ世界ノ形勢ニウ  
 トク舊習ヲ固守シ一新ノ效ヲ計ラス 朕徒ニ九重中ニ安居  
 シ一日ノ安キヲ偷ミ百年ノ憂ヲ忘ル、トキハ遂ニ各國ノ凌  
 侮ヲ受ケ上ハ 列聖ヲ辱シメ奉リ下ハ億兆ヲ苦シメン事ヲ  
 恐ル故ニ 朕コ、ニ百官諸侯ト廣ク相誓ヒ 列祖ノ御偉業  
 ヲ繼述シ一身ノ艱難辛苦ヲ問ス親ラ四方ヲ經營シ汝億兆ヲ  
 安撫シ遂ニハ萬里ノ波濤ヲ拓開シ國威ヲ四方ニ宣布シ天下

ヲ富嶽ノ安キニ置ンコトヲ欲ス汝億兆舊來ノ陋習ニ慣レ尊  
 重ノミヲ 朝廷ノ事トナシ 神州ノ危急ヲシラス 朕一タ  
 ヒ足ヲ舉レハ非常ニ驚キ種々ノ疑惑ヲ生シ萬口紛紜トシテ  
 朕カ志ヲナサ、ラシムル時ハ是 朕ヲシテ君タル道ヲ失ナ  
 ハシムルノミナラス從テ 列祖ノ天下ヲ失ハシムル也汝億  
 兆能々 朕カ志ヲ體認シ相率テ私見ヲ去リ公議ヲ採リ 朕  
 カ業ヲ助テ 神州ヲ保全シ 列聖ノ神靈ヲ慰シ奉ラシメハ  
 生前ノ幸甚ナラン

要するに、君民一體の皇國的組織を、精神的に眞に強大ならしめ、  
 以て國運を宇内に發展せしめようとせられたものに外ならな  
 い。實に明治維新こそは、一千二百餘年以前の大化の改新と遙  
 かに相照應する所の大改革であつて、その精神とする所は、神武

創業の古に復るといふのであり、武家時代とは違つて、皇室を直接の中心とする國家の組織的肇造の常道に立直つて、躍進を遂ぐるに至つたものといふべきである。

かくて諸侯の版籍奉還となり、廢藩置縣の斷行となり、以前に發生してゐた公武間の差別や、士民間の階級的差別を除き去り、官制の統一、兵制・税制・學制又は貨幣制度の統一など皇國的統一が急速度に進展した。やがて地方の自治制や立憲政體が確立し、選舉も制限選舉より普通選舉に進み、國家の中心に於ては、皇室典範に於て皇位・皇業の傳統が明確に昭示せられると共に、國家は全國民の奉仕する皇國であつて、一人たりともその外に立つものがないやうに、その組織が世運と共に進展しつゝあるのである。その間、思想上に、政治上に、又經濟上に幾多の問題や動搖

があり、時には國家多難と思はれることが再三であつても、それは擴皇室の國家組織を新たな段階にまで進展せしめるための過渡期に於ける煩悶に過ぎないことは、今日までの歴史が實證して居る。そして維新以來、我が國の領土は海外に擴大し、民族進展の第一線は遠く大陸に伸び、他の幾多の民族を新に我等の兄弟姉妹として包容し、相互の間に若干の問題はあるけれども、彼等は皆擴皇室の國家の中に、皇德皇化の下に一元的に包容せられ、やがて皇國的組織の中に全く融合同化すべきものであることは、往昔からの歴史に徴して明らかであり、亦必ずかくならしむべき所のものである。(皇國日本)

## 二 英雄と偉人

土田 杏村

土田杏村  
名は茂  
哲學者・評論家  
新潟縣生  
昭和九年歿  
年四十

偉人といふ時に、我々がすぐに聯想するのは、英雄や天才であるが、英雄や天才と偉人との相違は何處にあるだらうか。私は先づ英雄の性格を分析していつて、それと相違する偉人の性格を明らかにしてみたい。

英雄と天才との間の區別も明瞭でない。

天才は人間活動のあらゆる部面に現れる。宗教的の天才、學問的の天才と、あらゆる種類の天才が現れるけれども、英雄は専ら人間社會の政治的部面に現れる。人間の社會生活は、思想的、經濟的などいろいろの部面を含むにしても、最後の統一形式として政治があり、その政治形式によつて社會生活は全體的な纏りを得るのである。英雄は専らこの政治的部面に現れて來る點で、天才とは相違する道を歩むものとなる。

英雄の性格は、第一には強い自信である。繼續せる意志があつて、深く自らを信じてゐる。英雄と普通人との質的の相違はたとひ大したものではない場合にも、普通人は英雄のやうに強い自信を持つことが出來ない。普通人が懷疑し、挫折し、失望するところを、英雄はあくまでも斷行し、再起し、希望を大きくする。成功すれば自分の力量が實驗されたものとして、その自信を一層鞏固にするし、失敗すれば一つの試煉が與へられたものとして、その抵抗力を一層鍊磨するであらう。英雄には自棄や失望がない。若し自棄や失望が起つたとすれば、その時は英雄が最後の賭に失敗して、その運命を壞し、地に仆れた時であるだらう。人生の悲劇として、これ程悲惨なものはない。

英雄の性格の第二は、強い直覺力である。論理的に整然と綜合

して行くといふではなくて、現象から来る感覚的な印象の上に直に総合的の見通しを加へ、その現象の全體的に動いて行く方向を洞察するのである。

英雄の性格の第三は、強い示唆力である。大衆の上に特異の暗示を與へ、その暗示の下に大衆を或方向へ動かして行くことに、英雄は特殊の天分を持つてゐる。かやうにして、英雄は結局大衆を、社會を、政治的に支配する。

英雄の性格の第四としては、その強い支配欲を擧げなければならぬ。人間が人間を支配することは、人間の最も原始的な本能であるが、この支配は政治的形式に於て最も完全な形態を示す。英雄は元來その本能的な支配欲を誰よりも強く持つ人間であるから、この支配欲を働かす爲に、みづから社會の政治的部

面に現れて來るといつてもよいであらう。

英雄の性格が以上のやうに解剖されると、偉人の性格は、これに對照して、おのづから明らかにされて來る。英雄は人間的なエネルギーに於て確に普通人を超えたものであるが、同時にそれは人間として厭ふべき要素をも多分に含んでゐる。我々は、人間的なエネルギーを正しく表現するために、英雄のこの厭ふべき要素から離れなければならぬ。かやうにして英雄を修正したものがまことの偉人なのである。

英雄は人間社會の政治的部面に現れるが、偉人は政治だけでなく、すべての部面に現れる。宗教的偉人、學問的偉人など我々はあらゆる部面に偉人を見ることが出來よう。しかし偉人は、天才が、たゞそれだけの部面で卓越したエネルギーを表現してゐる

るといふのは違つて、一つの部面に即しつゝなほ人類的社會的に、全體的であり総合的でなければならぬ。言換へれば、人間の社會を全面的に率ゐるものでなければならぬ。天才は人間の一つの行動の中に現れるが、偉人は人類として、社會としての進みの道に現れる。随つて偉人は、必ずしも政治的に人間を率ゐはしないが、政治的に率ゐたと同じ實績を擧げつゝ人間を率ゐて行くのである。

偉人は時代に對して深い直覺力を持つてゐる。しかしその直覺力は論理的な綜合となつて現れる場合もあらう。いかに精密に論理を築いていつたにしても、論理は部分的の分析に向ふものであるから、最後の綜合は直覺的に行はれなければならぬ。偉人はその綜合力を持つのである。

偉人は自らなる感化力、影響力を持たなければならぬ。英雄は大衆の中に宗教的な信頼を博し、大衆を示唆することに特殊の力を持つてゐるが、偉人は特に大衆を示唆しようとしぬ、或は大衆を示唆する技術を弄しようとしぬ。しかしその行動は自ら大衆に信頼せられ、大衆の動きの目標になるのである。偉人はその點で、人類の模範、社會の標識であるといつてもよい。偉人は支配欲によつて動くものではないが、その行動は、人間を社會を率ゐるものとなる。最後に偉人は、英雄に見たと同じやうな強い自信を持つてあらう。自信は結局、人間的自覺の究極點だからである。しかし偉人の自信は、英雄に見るやうに狂信的なものではなく、十分の自己批判を含むのが常となつてゐる。自信の鍛錬は、事實反省なしに行はれるものではない。反省に

よつて鍛錬された自信なればこそ、人類のあらゆる惱を含んで人間的であり、總べての人に人類的模範としての信頼を得るのである。我々は必ずしも英雄を要求しないが、偉人は出現してほしい。人間はそれ／＼違つた個性を持つだけであつて、その中に質と量とに於て、言換へれば、人間的エネルギーに於て、普通人よりも遙かに卓越したのも生れる筈であるから、偉人は必ず出現し得るのである。唯そのエネルギーは、英雄的でなく、偉人的に發揮されなければならぬ。あらゆる方面に於て行詰つた現代の社會は切に偉人の出現を仰望してゐる。(紫野雜記)

### 三 世界の四聖

高山樗牛

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人に非

高山樗牛  
名は林太郎  
評論家・哲學者  
文學博士  
山形縣鶴岡の人  
明治三十五年(三  
五)歿  
年三十二

伽毘羅國  
中印度にあつた  
王國  
恆河の支流ロヒ  
ニ河のほとり  
悉達多  
頓吉と譯す  
佛陀  
浮圖  
浮屠



釋迦牟尼  
京都神護寺

ずんば誰かこれを能くせんや。釋迦孔子ソクラテス基督の四  
人世呼んで世界の四聖と稱す、宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。

父は淨飯王、母は摩耶夫人、その本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道せる後の尊號なり。釋迦、身は一

國の太子に生れたれども、夙に思を人生の問題に潜め、二十九の歳その妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隠れて道を修むること六年、終に人生の奥義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十

餘年の間北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒に思索の高遠を歡びて人生の疑問に適切ならず、偏に幽玄なる談理と慘澹たる苦行とによりて安心の道を求めたり。その流派を樹てて相争ふ所は畢竟名目上の優劣のみ、未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、その鴻大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をして歸依する所を知らしめたり。

孔子名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去る二千一百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり、學徳愈進

木鐸  
金口木舌、政教ヲ施ス時、振リテ以テ衆ヲ警ムル所ノ者ナリ。  
(論語註)

魯國  
今の山東省の内

大司寇  
裁判の長官  
齊侯  
景公

む。魯の定公の時に至り、擢てられて大司寇の職に就く。治績大いに擧り、内外その風采を想望す。時に齊侯、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子、時運の非なるを見、



孔子  
魯國  
子山

子、時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方の遊説を試みたり。當時の支那は謂はゆる春秋戰國の

亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を掃へり。或は臣にしてその君を弑する者あり、子にしてその親を害する者あり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に

道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頹廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出て、大義、名分を天下に唱へて狂瀾を既倒に廻さんとす。その志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方に漂浪すること十三年。時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、嗚呼、吾が道終に窮せり。世終に吾を知る者なきかと。門弟子貢慰めて曰く、何ぞ夫子を知る者なからんや。孔子曰く、天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す。吾を知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを疾む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんやと。幾何もなく歿しぬ。時に年七十三。



ステラクソ

ソクラテスは希臘のアテネ府に住める一彫刻師の子なり。その生れしは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦、孔子と年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に留り、道德は空文の上のみ貴ばれたり。その状態は釋迦當時の印度のごとく、人生社會の實際に關しては殆ど裨益するところ無かりき。ソクラテスは慨然として時弊の救濟を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學派の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻撃して一



歩も假借せず、侃諤の正義はその稀代の雄辯と相伴なひて一世を風靡せり。然るに、喬木は風に折らるゝの喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざるもの相謀りて、國法に背けるものとしてソクラテスを讒訴せり。その訴狀に曰く、ソクラテスは國教を信ぜずして異教を翹め、人心を惑亂せり。國法によりて死刑に處すべしと。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども、判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く「命のみ」と。その獄中にあるや、常にその門弟子を集めて生死、靈魂、未來の事を説き、人の脱獄を勸むるものに對しては、輒ち答へて曰く、予は唯正義に導かれんのみ。死

アスクレピアス  
醫藥を掌る神

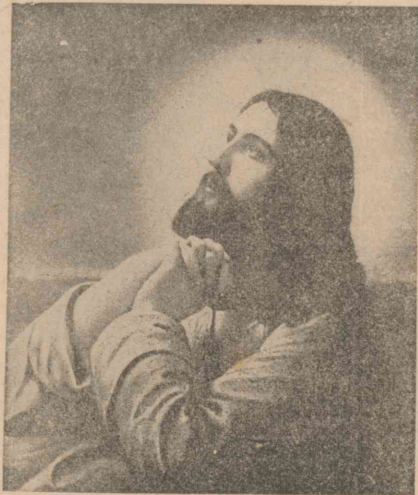
ベトレヘム  
小亞細亞のバレスチナの市  
エルサレムの西  
南約十軒

ヨハネ  
ヘブライの有名人豫言者

また何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上にと知らずや。と。終に従容として毒を仰いで歿しぬ。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く、爾、一雞を以てアスクレピアスの神に捧げよと。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテスはかくして逝きぬ。年七十。

基督は本名を耶蘇といふ。基督とは「膏灌がれたる者」といふ義にして、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベトレヘムに生る。西曆紀元第一年は實はその生後四年に當るといふ。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃豫言者ヨハネの洗禮を受けて始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして

その福音を傳へたり。當時羅馬帝國は榮華已にその極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異荐に至りて天下寧日なし。殊に基督の故國なる猶太は久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇なる淫祠を崇拜して益放縱に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。こゝにおいて一世の人心は舐焉として、一大偉人の現出してこの暗黒の社會を照破せんことを渴望せり。基督はこの間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子なりと稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳せしかば、遠近



基督

エルサレム  
亞細亞の西部、パ  
レスチナの都邑

靡然としてこれに赴けり。僧侶學者官吏等これを喜ばず、猥に新法異説を唱へて民を惑はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督豫めこの事あらんことを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く、神よ、彼等を赦せ。彼等はその爲すべき所を知らざればなり。と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、エルサレムの女子よ、我が爲に哭くなかれ、唯己と己の子との爲に哭け。と。かくの如くして、基督は三十三年を一期として十字架上の露と消去りぬ。基督歿して後、その弟子等は激烈なる迫害に抵抗してその教を天下に弘めぬ。基督教即ちこれなり。

以上は四聖の略傳なり。その人物事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。而して、四聖の中釋迦を

除きては、何れも轉軻不遇の間にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とは何れも讒人の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔殺せられたり。慘澹たりと謂ふべし。然れどもこれらの人々の志す所は天下後世にあり。現世の禍福、一身の安危は毫もその顧慮する所にあらず。故にその死に就くや、泰然として恰も歸するが如し。孔子はその一身の不幸を憂へずして、却つて、わが道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや」と嗟嘆せり。釋迦は衆生の爲にその妻子と王位とを抛ちて食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遭うて揚言して曰く、正義を信ずるものに取りて、死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、その一日即ち國民の迷

涅槃

梵語ニルツナ

無爲

安樂

寂滅

不生不滅などと

譯す

身を修め

古ノ明德ヲ天下ニ明ラカニセン  
ト欲スル者ハ先  
ヅ其ノ國ヲ治  
ム。其ノ國ヲ治  
メント欲スル者  
ハ先ヅ其ノ家ヲ  
齊フ。其ノ家ヲ  
齊ヘント欲スル  
者ハ先ヅ其ノ身  
ヲ修ム。其ノ身  
ヲ修メント欲ス  
ル者ハ先ヅ其ノ  
心ヲ正シウス。  
其ノ心ヲ正シウ  
セント欲スル者  
ハ先ヅ其ノ意ヲ  
誠ニス。(大學)

を覺さざるべからず」と。基督は己を罪に陥るゝ者の爲に神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の鴻大にして無邊なるや。四聖はその生れたる處と時とを異にす。故にその教理にも亦多少の差異なきを得ず。今その大要を擧ぐれば左の如し。釋迦の教理は煩惱を斷滅して涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始りて苦に終る。生老病死、いづれか苦にあらざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は「我」の一念に執着するにあり。故に吾人は「我」の一念を脱却して、無我・無念の境界に達せざるべからず。これ、人生究竟の樂地にして、涅槃即ちこれなり。孔子の教は身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり、而して身を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父

子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに基づく。人は生れながらにして、美德を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを完うする能はざるもの多し。教育の要こゝに於てかあり。既に教育を受けて身修らば、家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら治るべく、國治らば、天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始りて、治國、平天下に終るものと見るべし。ソクラテスの教は所謂知徳合一説なり。謂へらく、真正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて行はざると行うて知らざるとは、共に知識、道德の眞正なるものにあらず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となせば、正義自らその中にあり。正義は靈魂の満足なり。而して靈魂は肉體と異にして、不朽不滅なるものなり。故に吾人の正義を

山上の垂訓

基督が猶太の祝  
福の山で授けた  
教訓  
新約全書馬太傳  
五・六・七に出て  
ゐる

行ふや、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず。道德は富貴のために存せず、然れども富貴は道德の中に在り。と。基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。曰く、心の貧しき者は福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲しむ者は福なるかな、その人は慰めらるべければなり。飢ゑ、渴く如く、義を慕ふ者は福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。憐む者は福なるかな、その人は憐を得べければなり。心の清き者は福なるかな、その人は神を見るべければなり。惡に敵するなかれ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をも回らしてこれに向けよ。汝の隣人を慈しみて、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために、義をその前に行ふなかれ。汝等施をするとき、右

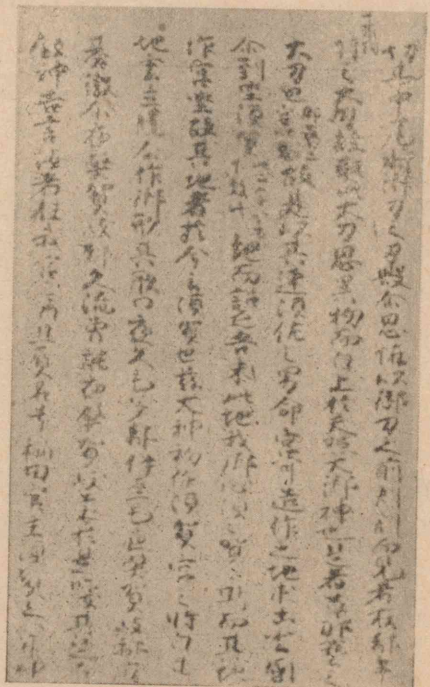
の手に爲す所を左の手に知らしむるなかれ。隠れたるを鑿み給ふ神はあらはに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼事ふること能はず。人を是非するなかれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝等求めよ。然らば與へられん。尋ねよ。然らば遇はん。門を叩け。然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪（シムル）に至る路は濶く、その門は大きく、これより入る者は多し。嗚呼、いかに生命に至る路は窄く、その門は小さく、その路を得る者の少きぞや。凡そこの訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聴けども行はざる者は、沙上に屋を架せる愚人の如し。と。基督教の神髓は、後世人如何なる色彩を加ふとも、いづれもこの山上の垂訓を基とせざるはなし。

嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してこの教の今なほ凜々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りて道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠なる救済者なりと謂ふべし。その遺徳の高大なること何を以てこれに比せんや。（釋牛全集）

#### 四 上古の文學

太古以來奈良朝末期までを上古と稱す。抑、原始文學が敘事的なりしか抒情的なりしかは姑く措きて、我が國上古の文獻に現れたる文學は神話傳説歌謠の類なり。これらは未だ外來文化の影響を被ること甚だしからず、善く日本民族固有の精神を反映したり。我が國元來文字無し。故に古事記日本書紀（フキトキ）・風土記

挿版  
 其の中の尾を切  
 りたまふ時御刀  
 の刃毀けき怪し  
 と思して御刀の  
 前もて刺し刺き  
 て見そなはしし  
 かば都牟刈の大  
 刀あり故此の大  
 刀を取らして異  
 しき物ぞと思し  
 て天照大御神に  
 白し上げたまひ  
 きは草那藝の大  
 刀なり(那藝の  
 二字音を以て  
 す)故是に其の  
 逆須佐之男命宮  
 造作可き地を  
 出雲の國に求ぎ  
 たまひき爾に須  
 賀(此の二字音  
 を以てす下此に  
 效ふ)の地に到  
 り坐して語りた  
 まはく吾此の地  
 に來りて我が御  
 心清々しとのり  
 たまひて其地に  
 なも宮作りて坐  
 しましける故其



祝詞等これが記載年代とその内容の成立年代とは必ずしも一  
 致せりと観るべからず。唯その内容の本質を考察する時例へ  
 ば神話が歴史傳説となり、記紀の歌謠が萬葉集の和歌となりし  
 所に文學史的展  
 開の大體を認め  
 得べし。古事記  
 は現存最古の史  
 書にして、天地開  
 闢より推古天皇  
 までの事を敘す。  
 中  
 上卷は主として宇宙國家人類の創造に關する神話を録し、天照  
 大神の神德、素戔嗚尊の御活動を語るところ、殊に燦然たり。

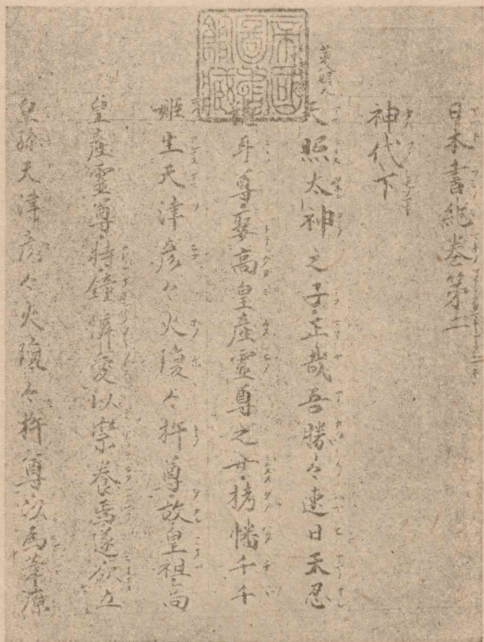
地をば今に須賀  
 とぞいふ故の大  
 神初め須賀宮作  
 らしし時其地よ  
 り雲立騰りき爾  
 御歌作みしたま  
 ふ其の歌に曰く  
 夜久毛多都伊豆  
 毛夜弊賀夜弊賀  
 基微爾夜弊賀夜  
 都久流曾能夜弊  
 賀岐賣是に其の  
 足名敘神を喚し  
 て汝は我が宮の  
 首たれと告りた  
 まひ且名を稻田  
 宮主須賀之八耳  
 神と負せたまひ

下兩卷は歴史傳説にして、上卷天孫降臨より續きて、國土發展の  
 狀を傳ふる所、最も力あり。就中神武天皇建國の御大業、日本武  
 尊の四方御平定、神功皇后の新羅御征伐の三事實は、我が祖先の  
 民族的發展力を物語れるもの、神話以來特に顯著なる國家的精  
 神は、こゝに最も鮮明に具象化せられたり。古事記と並び稱せ  
 らるゝ日本書紀は、神代より持統天皇に至るまでの正史なり。  
 その神代卷の根幹は古事記の神話と等しけれども、國文學的價  
 値は彼に及ばず。たゞ神武紀以後、古事記が國土の發展、武力の  
 伸張を主としたるに對して、書紀が尙他に儒佛二教の渡來、産業  
 の發達といふ如き事實を力めて敘したるは、前者の傳説的なる  
 と異なり、後者の歴史的なるを證するものなり。更に記紀の二  
 書が、各百首以上の歌謠を記録せることは、日本歌謠史上注目に

價す。その形式未だ整はずと雖も、天真爛漫たる抒情を旨とし、日常矚目する鳥獸草木を題とせるは、以て當時の國民が空想に

日本書紀卷第二

神代下



日本書紀

耽らず、實際を尙び、

素樸なる心情を有

せしを示すものな

り、

記紀の傳ふる如き

神話傳説を地方的

に統一せりと見ら

るゝものは風土記

なり。風土記は元來地理書にして、各國に撰進を命ぜられたるものなるが、當時の風土記にして現存せるは出雲常陸播磨等の

數種に過ぎず。その文古拙にして、神話傳説の外、風俗言語乃至地形の變遷などを知るに便あり。

祝詞は祭祀に當りて神前に奏せし詞なり。既に天岩戸神話にこの事見えたれば、その起源の古きを知るべし。されど今日存する古代祝詞は、その成立年代明らかならず。抑、祝詞の内容は祭祀の目的によりて區々なれども、神に對する祈願と祝福とを主眼とし、しかも皇室中心主義の思想顯著にして、隨つて又極めて國家的・國民的なり。その組織、概ね前半を神話的記述とし、後半を祈禱的記述とす。神々の功業を稱へ、祭祀の來由を語るその前半は、かの建國創業を語る記紀の神話と相關聯して、文學的興趣殊に豊なり。その形式を對句疊句によりて韻律的に整へたる部分は、内容の抒情的なると相俟つて、萬葉集の長歌に似通

へる所あり。要するに神に呼びかけ神に祈りて、我が祖先が現實の生活を更に清淨にし、一層幸福ならしめんとの意志を表示せるもの、これ祝詞なり。しかもその思想の根柢は、實に神代以來の言語信仰に存せしことを忘るべからず。記紀に見えたる如き歌謠は、抒情詩として發達し、遂に萬葉集二十卷の結集を見たり。仁徳天皇より淳仁天皇に至る約四百五十年間の作歌、大凡四千五百首を録す。作者は、上天皇より下庶民に及ぶ。随つてその内容の複雑多様なるは、實にこの集の一特色なり。長歌短歌旋頭歌等形式の變化に富めること、所謂萬葉假名を自在に驅使してその歌詞を綴れることも、また他に類例を見ず。しかも萬葉集の上古文學として永く日本文學史上に光彩陸離たる所以は、そこに赤裸々なる國民感情、純眞なる日

柿本人麿  
奈良朝の歌人  
持統・文武  
天皇に仕へた  
山部赤人  
奈良朝の歌人  
聖武天皇に仕へた  
山部憶良  
奈良朝の歌人  
文武・元明・元正・聖武の四天皇の朝に仕へて筑前守に累進した  
大伴旅人  
奈良朝の歌人  
元正・聖武の兩天皇の朝に仕へられた  
天智三年(三七二)卒  
年六十七  
家持  
奈良朝の歌人  
旅人の子  
聖武・孝謙の兩天皇の朝に仕へ中納言・持節征夷大將軍に拜せられた  
延暦四年(四八五)卒  
年五十七

本精神、明朝なる大和民族の心性の極めて率直に歌はれたればなり。固よりそこには既に外來思想の影響を見れども、猶萬葉集が我が國民思想の一大寶庫たることは争ふべからず。柿本



山部赤人  
藤原信實

人麿・山部赤人・山上憶良・大伴旅人・同家持等は、その代表歌人たり。人麿は敬神の念篤くして抒情に秀で、赤人は自然を愛好して敘景に優れたり。憶良と旅人は共に外來思想に影響せられながら、その歌風に於て、一は沈痛の響を有し、他は快活の調あるを特色とす。家持は歌數多けれども歌才に乏しと謂



はる。しかも善く忠君の情を詠じ崇祖の念を歌ひて、人を動かすものあり。

五 倭建の命

大帯日子淤斯  
呂和氣天皇  
景行天皇  
纏向の日代の宮  
奈良縣(大和國)  
磯城郡纏向村に  
その址がある

その御子  
小碓の命

倭比賣の命  
景行天皇の御妹

大帯日子淤斯呂和氣天皇纏向の日代宮にましまして天の下治しめしき。この天皇生みませる御子、橿角別王次に、大碓命次に小碓命、又の御名は倭男具那命(中略)こゝに天皇、その御子の建く荒きみこゝろを惶みまして詔りたまはく、西の方に熊曾建二人あり、これまつろはず禮なき人どもなり。故、その人どもを殺れとのり給ひて遣はしき。この時に當りて、その御髮、御額に結はせり。こゝに小碓命、その姨倭比賣命の御衣、御裳を賜はり、劍を御懷に納れていてましき。

故、熊曾建が家に到りて見たまへば、その家のほとりに軍三重に圍み室を作りてぞ居りける。こゝに新室樂せむと言ひとよみて、食物を設け備へたりき。かれ、そのあたりをあるきて、そのうたげする日を待ちたまひき。こゝにそのうたげの日になりて、その結はせる御髮を童女の髪のごと梳り垂れ、その姨の御衣、御裳を服して、既に童女の姿になりて、女人の中に交り立ちて、その室内に入りましき。こゝに熊曾建兄弟二人、その童女を見めて、己が中に坐せて、盛にうたげたり。故、そのたけなはなる時に、御懷より劍を出し、熊曾が衣の衿を取りて、劍もてその胸より刺しとほしたまふ時に、その弟建見畏みて逃げいでき。乃ちその室の階の本に追至りて、その背をとらへ、劍もて尻より刺しとほしたまひき。

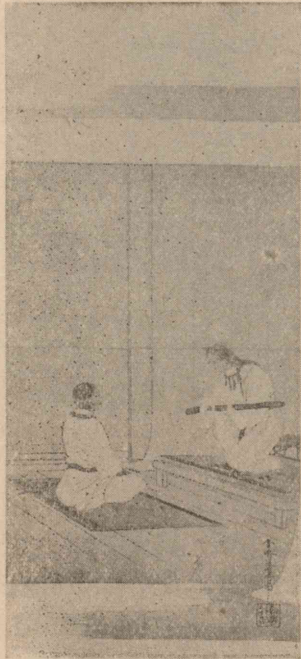
こゝにその熊曾建まをしつらく、その刀をな動かしたまひそ、僕  
白すべきことあり。とまをす。爾暫し許しておし伏せたまふ。  
こゝに白しつらく、汝が命は誰にますぞ。吾は纏向の日代の宮  
に坐しまして大八島國知しめす大帶日子淤斯呂和氣天皇の御  
子、御名は倭男具那王にます。おれ熊曾建二人まつろはず禮な  
しと聞しめして、おれを殺れ」と詔りたまひて遣はせり。とのりた  
まひき。こゝにその熊曾建、まことにしかまさむ。西の方に吾  
二人を除きて建く強き人なし。然るに大倭の國に、吾二人にま  
して建き男はいましけり。こゝをもて、吾、御名を獻らむ。今よ  
りのち、倭建御子とたゝへまをすべし」とまをしき。このこと白  
しをへつれば、即ち熟苳のごと振りさきて、殺したまひき。故、そ  
の時よりぞ御名をたゝへて倭建命とはまをしける。しかして

穴戸の神

長門(山口縣)  
の下の關と豊前  
(福岡縣)の門司  
との間の海峡に  
住んでゐた惡神  
東の方十まり  
二道  
東方十二國  
伊勢(伊賀・  
伊勢・志摩)  
尾張  
三河  
遠江  
駿河  
甲斐  
伊豆  
相模  
武藏  
總(安房・上  
總・下總)  
常陸  
陸奥

還り上ります時に、山の神、河の神また穴戸の神を皆ことむけや  
はして參上りましき。(中略)

こゝに天皇また頻きて、倭建命に、東の方十まり二道の荒ぶる神、  
またまつろはぬ人どもをことむけやはせ。とのりたまひて、吉備



倭建命の劍賣  
谷口香橋劍賣受

の臣等が祖、名は御  
鉏友耳建日子を副  
へて遣はす時に、柎  
の八尋矛を賜ひき。  
故命を受けたまは

りて罷りいでます時に、伊勢の大御神の宮に參りまして、神のみ  
かどを拜みたまひき。その御姨倭比賣命、草那藝の劍を賜ひ、ま  
た御囊を賜ひて、若し急の事あらば、この囊の口を解きたまへ。と

相武の國  
今の相模國(神奈川縣)  
この頃は今の駿河國(靜岡縣)の一部も相武の國の中に入つてゐたらしい

燒遣  
今の靜岡縣(駿河國)志太郡(もとの益頭郡)焼津町

なも詔りたまひける。  
故、東の國にいであして、山河の荒ぶる神、またまつろはぬ人どもを悉ことごとくにことむけやはしたまひき。故、こゝに相武さむかひの國に到りませる時に、その國の造みやつこいつはりて白さく、この野の中に大沼あり。この沼の中に住める神、いたくちはやぶる神なり。とまをす。ここにその神を見そなはしにその野に入りましつれば、その國の造、その野に火をなもつけたりける。故、欺かえぬと知しめして、かの姨倭比賣命の賜へる御囊の口を解きあけて見たまへば、その裏うらに火打ぞ有りける。こゝに先づその御刀みよこもて草を刈りはらひ、その火打をもちて火を打出て、向火むかひびをつけて、燒き退けて還りいでまして、その國の造どもを皆斬り滅し、即ち火をつけて燒きたまひき。故、そこをば今に燒遣やきづとぞいふ。

走水  
今の神奈川縣(相模國)三浦郡浦賀町走水



それより入りいでまして、走水せりづみの海を渡ります時、その波なみの神

倭建の命  
松本風湖

浪をたてて、船ふねたゆたひてえ進み渡りまささず。こゝにその後、御名は弟橋比賣命あなをちひめのみこと白したまはく、あれ御子に代りて海中に入りなむ。御子はまけのまつりごと遂げて、かへりごとまをしたまふべし。とまをして、海に入りまさむとする時に、菅壘八重、皮壘八重、繩壘八重を波の上に敷きて、その上におりましき。こゝにその暴波あまなみおのづ

からなぎて、御船え進みき。かれ、その後歌はせる御歌、

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて と  
ひしきみはも

故、七日ありて後に、その後の御櫛海邊に依りたりき。乃ちその御櫛を取りて、御墓を作りてをさめ置きき。

坂本

相模の足柄峠  
命はこの峠を越  
え富士山の東北  
麓を経て甲斐  
(山梨縣)に出ら  
れたらしい

酒折宮

山梨縣(甲斐國)  
西山梨郡里垣村  
にその址がある

それより入りいでまして、悉に荒ぶる蝦夷どもをことむけ、また山河の荒ぶる神どもをやはして還り上ります時に、足柄の坂本に到りまして、御糧きこしめす處に、その坂の神白き鹿に化りて來立ちき。かれ、その咋のこりの蒜の片はしもて待打ちたまひしかば、その目に中りて打殺さえたりき。故、その坂に登り立ちて、ねもごろに歎かして、あづまはやと詔りたまひき。故、その國をあづまとはいふなり。

即ちその國より越えて、甲斐に出でて、酒折宮にましましける時

に歌ひたまはく、

・ にひばり 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる

こゝにその御火焼の老人、御歌をつぎて、

かゝなべて 夜には九夜 日には十日を

とぞ歌ひける。こゝをもて、その老人を譽めて東の國の造にぞなし給ひける。

その國より科野の國に越えまして、科野の坂の神をことむけて、尾張の國に還り來まして、その御刀の草那藝の劍を美夜受比賣の許に置きて、伊服岐の山の神を殺りに出でましき。こゝに詔りたまはく、この山の神は徒手に直に殺りてむとのりたまひて、その山にのぼります時に、山の邊に白き猪逢へり。その大きき牛の如くなりき。かれ言舉して詔りたまはく、この白き猪に化

科野の國

今は信濃の國と  
書く

科野の坂

美濃國(岐阜縣)  
高那郡坂本から  
信濃國(長野縣)  
伊那郡河智に越  
える峠

伊服岐の山

伊吹山  
近江(滋賀縣)・  
美濃(岐阜縣)の  
兩國に跨る高山

玉倉部

今の滋賀縣(近江國)坂田郡横川と岐阜縣(美濃國)不破郡今須との中間にある長競(たけくらべ)は玉倉部の訛

當藝野

今の岐阜縣養老郡(もと多藝郡)養老湯の附近

當藝斯

船尾の輪

杖衝坂

今の三重縣(伊勢國)三重郡内郡村大字采女の西のはづれにあ

尾津のさき

同縣桑名郡多度村古濱村の地

れるものは、その神の使者にこそあらめ。今殺らずとも、還らむ時に殺りてむ。どのりたまひて、のほりましき。こゝに大氷雨をふらして、倭建命をうち惑はしまつりき。故、還り下りまして、玉倉部の清水に到りて息ひませる時に、御心や、寤めましき。故、その清水を居寤の清水とぞいふ。

そこより發たして、當藝野の上に到りましし時にのりたまへるは、吾が心恆は虚よりも翔り行かむと念ひつるを、今吾が足え歩まず、當藝斯の形に成れり。とぞのりたまひける。故、そこを當藝といふ。そこよりや、少しいでますに、いたく疲れませるに因りて、御杖をつかして、やゝに歩みましき。故、そこを杖衝坂といふ。尾津のさきの一つ松のもとに到りませるに、先に御食せし時、そこに忘らしたりし御刀失せずて、なほありき。かれ、御歌よ

みしたまはく、

尾張に たゞに向へる 尾津のさきなる 一つ松 吾兄を

一つ松 人にありせば 太刀佩けましを 衣着せましを

一つ松 吾兄を

そこよりいでまして、三重の村に到りませる時に、また、吾が足三重の勾なして、いたく疲れたり。とのりたまひき。故、そこをば三重といふ、

そこよりいでまして、能煩野に到りませる時に、國思ばして歌ひたまはく、

大和は 國のまほろば たゞなづく 青垣山ごもれる大和  
しうるはし

また、

三重の村

同縣三重郡内郡村大字采女にその名が残つてゐる

能煩野

同縣鈴鹿郡川崎村にある

平群 古の平群郷 今の奈良縣(大和國)生駒郡明治村のあたり

命の またけむ人は たゝみこも 平群の山の 熊白檮が  
葉を 髻華に挿せ その子  
この御歌は思國歌なり。又歌ひたまはく、  
はしけやし 吾家の方よ 雲居たち來も  
こは片歌なり。  
このとき御病にはかになりぬ。こゝに御歌を  
をとめの 床の邊に わが置きし 劍の太刀 その太刀は  
や。  
と歌ひ竟へて、即ち神あがりましぬ。かれ驛使をたてまつりき。

(古事記)

六 萬葉集鈔

近江の荒都 天智天皇の都し給うた近江の大津宮の舊址

滋賀縣(近江國) 滋賀郡滋賀村南

滋賀の崇福寺の 址が當時内裏の

あつた邊だといふ

大津市の北四軒 奈良山

奈良市の北西にある小山 姫歌越

辛崎 唐崎 滋賀の都の東北琵琶湖に臨んだところ

近江の荒都を過ぐる時よめる歌 柿本人麿  
玉櫛 畝傍の山の 榎原の ひじりの御代ゆ 生れまし  
し 神のことく 榎の木の いやつぎくに 天の下  
しろしめししを 空にみつ 大和をおきて あをによし  
奈良山をこえ いかさまに おもほしめせか 天さかる  
鄙にはあれど いはばしの 近江の國の さゝなみの  
大津の宮に 天の下 しろしめしけむ すめろぎの 神  
のみことの 大宮は こゝと聞けども 大殿は こゝと  
言へども 春草の 茂く生ひたる 霞立つ 春日の霧れ  
る もゝしきの 大宮處 見ればかなしも  
反歌  
さゝなみの滋賀の辛崎さきくあれど大宮人の船待ちかね

つ  
さゝなみの滋賀のおほわた淀むとも昔の人にまたも逢は  
めやも

富士山を望みて  
山部 赤人

天地の わかれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる  
富士の高嶺を 天の原 ふりさけ見れば 渡る日の 影  
もかくろひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きは  
ばかり 時じくぞ 雪は降りける 語りつぎ 言ひつぎ  
行かむ 富士の高嶺は

反歌

田子の浦ゆ打出でて見れば真白にぞ富士のたかねに雪は  
降りける

等しく衆生を  
思ふ

吾衆生ヲ觀ルニ  
偏黨無キコト羅  
枯羅ノ如シ。  
(最勝王經)

羅睺羅  
釋迦の子  
十大弟子の一人

子等を思ふ歌

山上 憶良

釋迦如來金口正しく説きたまふ、等しく衆生を思ふこと  
羅睺羅の如しと。又説きたまふ、愛は子に過ぎたるは無  
しと。至極の大聖すら尙子を愛する心あり。況や世界  
の蒼生、誰か子を愛せざらむや。  
うりはめば こども思ほゆ 粟はめば ましてしぬばゆ  
いづくより 來たりしものぞ まなかひに もとなか  
りて やすいしなさぬ

反歌

銀も金も玉もなにせむにまされる寶子にしかめやも  
族を喩す歌  
大伴 家持  
ひさかたの 天の門開き 高千穂の 岳に天降りし 皇

族を喩す歌  
田雲守大伴古茲  
悲が淡海三船の  
官言によつて免  
が官された時一  
に喩した歌一族持

祖の 神の御代より 櫛弓を 手握り持たし 眞鹿兒矢  
を 手挟み添へて 大久米の ますら健男を 先に立て  
取取りおほせ 山川を 岩根さくみて 履みとほり 國

筆蹟

雜歌  
泊瀬朝倉宮御  
宇大泊瀬幼武  
天皇御製歌一  
首  
暮去者小坂山爾  
臥鹿之今夜者不  
鳴寢家長箱  
ゆふされはをく  
らのやまにふす  
しかのこよひは  
なかすいねにけ  
らしも

雜歌

泊瀬朝倉宮御宇大泊瀬幼武天皇  
御製歌一首  
暮去者小坂山爾  
臥鹿之今夜者不  
鳴寢家長箱  
ゆふされはをく  
らのやまにふす  
しかのこよひは  
なかすいねにけ  
らしも

畝傍の宮に 宮柱 太知り立てて 天の下 知らしめし  
ける 皇祖の 天の日繼と 繼ぎて来る 君の御代々々

萬 葉 集  
或 本 紙 空  
覓 ぎ し つ ち は  
や ぶ る 神 を こ と  
む け ま つ ろ は ぬ  
人 を も や は し 掃  
き 淨 め 仕 へ 奉 り  
本 秋 津 洲 大 和  
の 國 の 檀 原 の

隱さはぬ 明き心を 皇方に 極めつくして 仕へ来る  
祖の司と 言立てて 授け給へる 生みの子の いやつ  
ぎつぎに 見る人の 語りつぎでて 聞く人の 鑑にせ  
むを あたらしき 清きその名ぞ おほろかに 心思ひ  
て 虚言も 祖の名斷つな 大伴の 氏と名に負へる  
ますらをの伴

反歌

劍太刀いよゝとぐべしいにしへゆさやけく負ひて來にし  
その名ぞ

志貴皇子

石ばしる垂水の上のさ蕨の萌えいづる春になりけるか  
も

志貴皇子  
天智天皇の皇子  
歌人  
靈龜二年(757)  
薨



輕皇子  
天武天皇の御孫  
草壁皇子の御子

安騎野  
奈良縣(大和國)  
宇陀郡の西部の野

高市黑人  
文武天皇の頃の歌人

安禮の崎  
靜岡縣(遠江國)  
濱名郡新居の崎の舊名

大伴  
今の大阪市の海岸あたり

楸  
ひさかきともいふ



輕皇子安騎野に宿し給ふ時よめる歌

柿本人麿

ひむがしの野にかざろひの立つ見えてかへりみすれば月  
かたぶきぬ

高市黑人

いづくにか舟はてすらむ安禮の崎漕ぎたみ行きし棚無し  
小舟

大唐に在る時本郷を憶ひてよめる歌

山上憶良

いざ子どもはやく日本へ大伴の御津の濱松待ちこひぬら  
む

病に沈める時の歌

をのこやも空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てず  
して

山部赤人

ぬばたまの夜の更けゆけば楸生ふる清き河原に千鳥しば  
啼く

暮春の月芳野離宮に幸せる時勅を奉りて

大伴旅人

むかし見し象の小川を今見ればいよ、清けくなりける  
かも

布勢の水海に遊覽し船を多祇灣に泊めて

大伴家持

藤の花を望み見て  
藤浪の影なる海の底きよみしづく石をも玉とぞ吾が見る

芳野離宮

奈良縣(大和國)  
吉野郡中莊村宮  
瀧にあつたといふ

勅  
聖武天皇の

象の小川

奈良縣(大和國)  
吉野郡中莊村宮  
瀧にある小川

象山から出て吉野川に入る

布勢の水海

富山縣(越中)  
氷見郡氷見町に  
ある十二町瀧

今は干拓されて  
小さくなつた

多祇灣

田子  
氷見町の南西軒  
もとは布勢の水  
海がこゝまでつ  
づいてゐた

天平五年  
聖武天皇の御代  
(一五五)

興に依りて詠める歌

わが宿のいさゝむら竹吹く風の音のかそけきこの夕かも

天平五年遣唐使の船難波を發ちて海に入

る時母の子に贈れる歌

讀人不知

旅人のやどりせむ野に霜降らばわが子はぐくめ天の鶴群

防人の歌

丈部造人麿

大君のみことかしこみ磯にふりうのはらわたる父母をお

きて

今奉部與曾布

今日よりはかへりみなくて大君の醜の御楯と出て立つわ

れは

酒を節度使卿等に賜ふときの御歌

聖武天皇

第四十五代  
天平勝寶八年(一四六)崩

寶算五十八

元興寺

もと蘇我馬子が  
大和國(奈良縣)  
高市郡飛鳥に立

てた寺で法興寺  
ともいふ

今の飛鳥大佛の  
地

奈良朝時代に奈  
良の左京に移り

新元興寺といふ  
この歌は天平十

年(元六)の詠

土屋文明

歌人  
明治二十四年(一  
五五)群馬縣生

眞淵

賀茂眞淵  
國學四大人の一

遠江國(静岡縣)  
岡部生

明和六年(一四九)  
卒

年七十三  
贈従三位

聖武天皇

大丈夫の行くといふ道ぞおほろかに思ひて行くな大丈夫  
の伴

自ら嘆く歌

元興寺の僧

白珠は人に知らえず知らずともよし知らずとも吾し知れ  
らば知らずともよし (萬葉集)

七 抒情詩としての短歌

土屋文明

吾々は短歌の本源は生物通有の表出活動にありと考へるのであるが、さういふ點から見ると、短歌は西洋詩論に謂ふところの抒情詩の規範に屬すべきものとなるのである。眞淵がその「文意考」中に「心にしぬばぬおもひあれば言にいでてうたへり」と言

文意考

一卷

我が古典の文の  
趣を評論したも  
の

寛政十二年版

つたのも、見るところは同じなのである。

表出活動が生命に直接であり本源的であることは今更言ふを要しないことであるが、表出活動そのものは實に生命の重要な一方面であつて、生命に附屬して居るものとか、生命のために存するとかいふ第二義的のものではないのである。生活といふ中には生命保存の爲の活動も含まれて居るが、この生命そのものの活動である表出活動こそは生活中最も重んぜられねばならぬのである。生活といふことを單に生命保存の手段たる行爲のみに限つて考へれば、生活のための藝術、人生のための藝術といふやうな考も生じて來るが、茲に言ふが如く考へれば、抒情詩は生命に最も直接な本源的なもの即ち生命そのものと考へねばならなくなるのである。伊藤左千夫が短歌を以て「叫び」

伊藤左千夫

歌人

千葉縣生

大正二年歿

年五十

である。喝破したのは多年の製作の實驗から悟入した結論であつて、その由つて來る所は以上の論と變らないのである。

勿論抒情詩的表現は單なる表出活動ではない。言語を手段とする複雑多岐なる表現活動であつて、寧ろ複雑な一つの意志的動作ではあるが、その根源に溯つて考へれば以上の如くなるのである。言語學者の中に、言語の發生に前行して既に情緒的の歌聲が存在したことを主張するものがあり、言語の發生は散文的といふよりも寧ろ生命の詩的方面にその種子を求むべきなといふやうなことを言つて居るものもあるが、これらの言説も上述の論旨に一層客觀的確かさを加へるものであらう。

西洋の詩論では、韻文をば、抒情詩・敘事詩及び戯曲に分けて論じて居る。戯曲のことは今茲にさしあたり必要はないが、西洋詩

論に言ふが如き抒情詩・敘事詩の区分は日本の詩歌を論ずるにもやはり必要であらうか。又必要とすれば如何なる理論が吾吾の問題に如何なる寄與をなし得るかといふことは、源に溯つて考察し直す必要があるであらうと思ふ。抒情詩及び敘事詩の比較区分については西洋詩論家の説が必ずしも一致して居るとは言へないやうであるが、極めて普通一般の論を要約すれば、抒情詩の主観的であるに對して敘事詩は客観的であり、抒情詩の個人的であるに對して敘事詩は對他的であり、抒情詩が感情の直接表現であるに對して敘事詩は境地の説明であるといふやうなことになる。但し吾々のこゝで注意しなければならぬことは、西洋詩論の抒情詩・敘事詩の論は、西洋文學の實際において、敘事詩と呼ばれ、又抒情詩と呼ばれる、甚だしく性質の異

なつた二種類の詩的作品の儼存して居るといふ事實から出發して居ることである。翻つて日本詩歌の實情を見れば如何であるか。日本の詩的製作品に於ては、少くとも西洋文學に於ける如く、抒情詩・敘事詩の分化は實現されてゐない。西洋詩論に言ふ抒情詩・敘事詩の区分も勿論質の相違ではなく、量の差別であるから、日本の詩歌の如きは實は觀察者の觀點のおき方一つで或は敘事詩とも見られ、又同一作品が抒情詩とも見られ得ることは言ふまでもないのである。けれども製作者の立場を考慮して見れば、日本の和歌は敘事詩としての性質よりも抒情詩としての性質の方が遙かに顯著なのである。例へば記紀・萬葉あたりの事件的記述を多分に含む長歌にしても、その根本の製作動機は抒情詩的の傾向が遙かに強いのである。殊に短歌に

至つては、抒情詩の最大特質たる感動の直接表現といふ一點に於て、實に抒情詩中の抒情詩とも言ふべきである。一體文學上の考方といふものは自然科学の場合などと違つて、概念の限界の問題などは全く重要ではない。重要なのは特質の中心の問題である。今現在の問題について言へば、短歌は抒情詩か敘事詩か、短歌中にも敘事詩的のものが有るか否かといふ問題よりも、短歌の特質の中心は抒情詩的のところにあるか、敘事詩的のところにあるかといふのが重大な問題なのである。吾々は寧ろこゝでも、前に引いた眞淵の「文意考」中の言、こゝろにしぬばぬおもひあれば言にいでてうたへり。これをうたといへり。また目に見、耳に聞くことのもだすべからぬわざある時は、言をつらねていふことをたゞへ言といへり。これを後の世にふみと

なむいふなる。しかあれば、うたは内よりおこり、たゞへ言は外より來るものなり」といつて居るのが日本文學殊に短歌の實際を道破して居ることを知るのである。

西洋古代諸國の歴史に既に見えたやうに、文學作品として抒情詩よりも敘事詩の方を早くから有つものが多いのは、こゝに述べるが如き抒情詩の自然發生史の階段が既に敘事詩の分化にまで到達したところから、その國民の文學史が始められるやうな情勢に置かれたのであらうし、又民族の個性が早く抒情詩を離脱して敘事詩に移るべく傾いてゐた點もあるのであらう。とにかくに吾々日本國民が現在に到るまで、人性の本源に基づくこと最も深い抒情詩中の抒情詩たる短歌の形式を保持して居るといふことは意義少い出來事とはいへない。

シャーマニズム  
黄教  
専らシベリヤ北  
部の諸種族間に  
行はれる一種の  
宗教で僧侶を經  
て心願をかけれ  
ば叶ふといふ信  
仰を有する

以上短歌の本源を生命活動の表出的方面に求め、抒情詩としての短歌の特質を一わたり考察したのであるが、短歌の發生を別な方面に求める學者もある。例へばこれを一種の宗教的方面、シャーマニズム等に關係せしめる見方もある。短歌がその發達の道程に於て宗教的活動と合體してゐたことのあるのは事實であらう。シャーマニズムに關係した歌舞によつて短歌の韻律的約束が成立し、改變された部分があることは事實であらう。けれどもそれは純粹なる表出活動としての抒情詩的要素に第二義的に附加せられた一時的の翳雲に過ぎない。短歌がよしんば宗教上の手段に用ひられた時でも、その中心特徴は生命の表出活動たるところに存したのである。又これに關係して、短歌が文學ならざる歌謠から分化發達したといふ考も一

部に行はれる。これも古代歌謠中には近代文學の概念からは甚だしく乖離した姿を有つものがあるといふことは言へよう。しかしながら文學といふ考からしてこれらの人の見方は既に誤つて居るのである。一體文學なる概念を獨斷によつて豫め作つておいて、その概念を尺度として實際の作品を文學的であるとかないとかいふ態度は論理的とは言へないのである。近代文學と上代短歌との間には相違せる特徴も各に存する。けれどもその生命の表出的方面であることには根帯相通じて變る所がない。若し短歌を含めて文學なる概念を定めようとするならば、この古今に通ずる特質を外にしてこれを定めることは不可能な理である。又古代歌謠に文學的生命の存在するところが感得出来ないやうでは既に文學の論は成立し得ないので

ある。古代歌謠は一面これを理論的に見るものにとつては宗教的儀式的なり民間習俗的なりの觀點からのそれ々に相應なる資料を供するであらう。されど抒情詩として短歌の價値を取上げるものにとつては、常に最も純粹なる抒情詩としての特徴を十分に具備して居るのである。たゞ一面的の翳陰を過大視して短歌が文學ならぬ歌謠から分化したと考ふる如き説は、茲に言及するにも及ばないのである。實例に徴して言へば、記紀の歌謠は單なる歌謠たるに止つて、あの中に文學が存しないといふが如き文學の概念であるならば、かくの如き文學の概念はすでに價値なきものと言はざるを得ない。以上、短歌の抒情詩としての、又生命表現としての特徴を繰返し述べたが、要するに短歌は言語を手段とした意志動作としての

表現作用に外ならぬ。されば言語の問題は短歌、否抒情詩に關する限りは常にその中心問題となるのである。〔短歌入門〕

### ハ 深 穩

阿 部 次 郎

阿部次郎

哲學者

東北帝國大學教

授

明治十六年(五四)

山形縣生

深穩とは何であるか。それは穩かさといふ一つの性質がその程度を深めて行つたものであるか、換言すれば「非常に穩かな」とを意味する言葉であるか、それとも又それは深さ並に穩かさであるか、深さと穩かさとの二つのものが並存することを意味する言葉であるか。恐らくそれは兩者のいづれでもない。深穩とは一種特別な穩かさである、深みのある穩かさである、深みによつてその性質に特殊な風格を帯びるに至つた穩かさである。深穩の境地に到達するに至つて、穩かさは「風波のないこと」他と

衝突せぬこと、氣骨と圭角とを存せぬこと——約言すれば墮落せる意味のいはゆる「圓滿」といふやうな消極的規定を脱却して、内心の平靜から放射するおのづからなる柔かさ、和煦たる好日のやうな靜かなる輝きを意味することになるであらう。潑刺たるものが豊に自由に内心に動きながら、それが奥深きところにおのづからなる纏りを持つてゐるが故に、他に對しても又靜かに柔かに角立たぬ印象を與へるのである。私は深穩といふ言葉をかういふ意味に解釋する。かく解するとき、深穩は主觀の態度に關する——心の持方に關する私の理想である。さうしてそれは、客觀的内容としての「宇宙的なもの」の理想と相補足する。深穩の氣象を以て宇宙的なものに觸れ、嗅ぎ、味はひ、想ひ、慕ひ、あこがれ、結局益、深く益、密にこれを體得すること——この

理想に私は私の一生を捧げたいと思ふ。自分の怠惰をむちうち、自分の浮躁とざわめきを制御しつゝ、この無限の道を歩けるだけ歩いて死にたいと思ふ。社會も歴史も、私に取つては、この中心問題と交渉する限りにおいて大いに意味があるのである。

これは私だけに限つた、特殊な、時代外れの目標であるか。私は決してさうは思はない。縱令今日はどうであつても、明日になれば人類は再びこの道に於て落合ふであらう。私がこの道を行くのは、人類の爲に明日を準備する事業の一端を分擔するのである。浮躁とざわめきとの唯中にゐて、人類の過去と將來とを繼ぎあはせるつなぎ目の一つとなるのである。現在の上へのしかゝつて來てゐる社會と歴史との問題に、その「意味」を指定



田能村竹田

江戸時代後期の

畫家

豊後國(大分縣)

竹田の人

天保六年(一八三五)

卒

年五十九

贈從五位

山中人饒舌

二冊

竹田の繪畫及び

人生に關する觀

察を隨筆的に述

べたもの

西土人

支那人を指す

するのである。  
私が深穩といふ言葉に最初に注目したのは、田能村竹田の「山中人饒舌」を読んだときである。彼の漢文を書き下しにすれば、彼はこの畫論の末尾に近く、かういつてゐるのである。「本邦人は



松 溪 聽 泉  
田 能 村 竹 田 筆

性輕疾、西土人は性遲緩、氣稟固より既に同じからず、故に學者これを精察熟慮して、靜以て心を養ひ、健以て腕を運らし、筆力深穩、墨氣沈厚、以て斯の藝にあそぶべきなり。もしあるひは然らず

董 巨  
北宋の畫家董源  
同じき僧巨然

ば、則ち硯を磨してしばく、破り、筆を埋めて塚を作り、董巨の闕奥を覗はんと欲すとも、豈能く得べけんや。  
私はこの文章における竹田の支那崇拜に拘泥する必要を感じなかつた。これを畫論の範圍に限られるものと解する氣もなかつた。私は直に、竹田の畫論の根柢になつてゐる心法の意味においてこれを理解した。さうして久しく自分の心のうちにあつてしかも表現の途を知らなかつた理想に、簡潔な言葉を與へられたことに隨喜した。深穩は人が生きて行く主觀的態度一般の問題である。故にそれは又繪畫の中にもあらはれて、これを墮落せる意味の遊戯若しくは宣傳と煽動とを意味する手段以上のものとしてゐるのである。筆力の深穩と墨氣の沈厚とは、凡そ深穩と沈厚とを必要とする人類の幸福に寄與するそ

杜甫  
支那唐代の詩人

れ自身に意味ある事業の一つでなければならぬ。私は又杜甫の詩の中に深穩といふ言葉を發見した。それは、韋諷録事宅觀曹將軍畫馬圖引と題する古詩の一節である。かれはこの詩によつて描かれたる九匹の馬を讚美した。さうして「憐む可し九馬神駿を争ふ。顧視清高氣深穩」といつてゐるのである。私はこの句によつて唐代の文化を思ふ。それは和戰兩様の意に於て全東洋的になつた廣い世界である。さうして馬はこの世界的交通における重要な用具として、精細に觀察せられ、藝術的に愛重される。

繪畫や彫刻の優れた馬に對して、我々は文學の方面においても、又このやうな神に徹したその描寫を見るのである。それは荷馬車をひくべき、去勢されたおとなしい駄馬ではない。それは

松尾芭蕉

江戸時代の俳聖  
伊賀國(三重縣)  
上野生  
元祿七年(三三〇)  
歿  
年五十一

石山

滋賀縣大津市石

山町

岩間

石山町の南郷

國分山

石山町國分にあ

る山

戰馬である。「此皆騎戰、一萬に敵す。縞素漠々として風沙を開く。神駿こそは彼等の本領である。さうして眼つきの清高と氣象の深穩とが正に彼等の神駿の根本條件となつてゐるのである。深穩はこゝに劇烈な緊張せる活動との相關に於て見られる。内に氣象の深穩を缺くものは、風沙漠々たる間に驅馳する名馬となるの資格を缺くのである。如何にもして深穩の境地に近づきたい。深穩の氣象を以て與へられたるものを受け、課せられたる苦痛に堪へ、新しき世界の創造に精根を盡くし得る者となりたい。(讀書と散步)

九 幻住庵の記

松尾芭蕉

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山といふ。そのかみの國

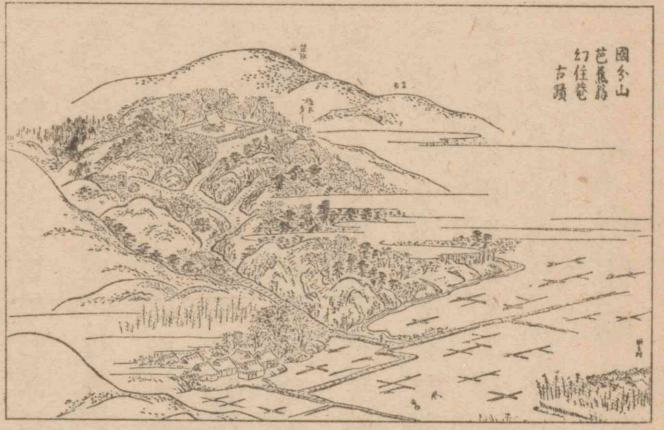
國分寺 聖武天皇の天平十三年(一〇七二)頃諸國に創設

翠微 未ダ頂上ニ及ベズ、旁ニ在リテ數陀タル處ヲ謂フ。嶺氣青緑色ナリ、故ニ翠微ト名ヅタ。(爾雅ノ疏)

唯一 儒佛の説を採リ、いれぬ純粹の神道

兩部 本地垂迹の説に基き神佛二教の旨を合はせおこした神道の一派、但しこゝはたゞ神佛の意光を和げ其ノ光ヲ和ケ其ノ區ニ同ジクス。(老子)

曲翠 芭蕉の門人、近江國(滋賀縣)膳所生



幻住庵 東海道名所圖會

じの僧何がしは勇士菅沼氏、曲翠子の伯父になん侍りしを、今は

分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて翠微に登る

こと三曲二百歩にして八幡宮立たせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ思むなることを、兩部光を和げ、利益の塵を同じうし給ふもまた貴し。日頃は人の詣でざりければ、いと々神さび、物しづかなる傍に住捨てし草の戸あり。蓬根笹軒をかこみ、屋根漏り、壁落ちて、狐狸ふしどを得たり。幻住庵といふ。ある

五十年や、近き身

元祿三年(一六九〇)芭蕉四十七歳

象潟 秋田縣(羽後國)島海山の西北麓にある名所

やがて出でじ 吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ (西行法師)

吳楚東南に走り 昔聞ク洞庭ノ水。今上ル岳陽樓。吳楚東南ニ拆ケ、乾坤日夜ニ浮ブ。(唐の杜甫)

八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ残せり。予亦市中を去ること十年ばかりにして、五十年や、近き身は、蓑蟲の蓑を失ひ蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高砂子歩み苦しき北海の荒磯に踵を破りて、今年湖水の波に漂ふ鳩の浮巢の流れ留るべき蘆の一本の陰たのもしく、軒端葺きあらため、垣根結ひそへなどして、卯月の初、いとかりそめに入りし山の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ。

さすがに春の名残も遠からず、躑躅咲きのこり、山藤松にかゝりて、時鳥しばし、過ぐるほど、宿かし鳥の便りさへあるを、啄木鳥のつゝくとも厭はじなど、そよりに興じて、魂は吳楚東南に走り、身は瀟湘洞庭に立つ。山未申にそばだち、人家よきほどに隔り、南薰峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山比良の高嶺

瀟湘洞庭

惠宗ガ煙雨歸  
雁ニ我ヲ瀟湘洞  
庭ニ坐セシム。  
扁舟ヲ喚ビテ歸  
リ去ラント欲  
ス。故人道ヲ是  
レ丹青ト。  
(宋の黄山谷)

笠取

京都府(山城國)  
宇治郡笠取村  
石山の南西十二  
軒

三上山

近江富士  
石山の東北二十  
四軒

土峯

富士山

猿丸大夫  
墓は田上村の麓  
にあるといふ

海棠に

徐老ガ海棠ノ巢  
ノ上。王翁ガ主  
持ノ庵。  
(宋の黄山谷)



幻住庵の額

より辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣垂る、舟あり。笠取  
に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、  
螢飛びかふ夕闇の空に、水雞のたゞく音、  
美景物として足らずといふことなし。  
中にも三上山は土峯のおもかげに通ひ  
て、武藏野のふるき住家も思ひ出でられ、  
田上山に古人をかぞふ。  
なほ眺望隈なからんと、後の峯に這上り、  
松の棚つくり、藁の圓座を敷いて猿の腰  
掛と名づく。かの海棠に巢をいとなみ、  
主簿峯に庵を結べる王翁徐佺が徒には  
あらず。たゞ睡癖山民となりて、辱顔に

とくくの雫

とくくと落つ  
る岩間の苔清水  
汲みほすほども  
なきすまひかな  
(傳西行法師)

高良山

福岡縣(筑後國)  
三井郡高良山神  
宮寺

甲斐何某

藤木甲斐守敦直  
寛永時代の書家  
慶安二年(三〇九)  
歿  
年六十八

足をなげ出し、空山に風を捫つて坐す。偶、心まめなる時は、谷の  
清水を汲みて自ら炊く。とくくの雫を侘びて一爐の備いと  
輕し。  
はた昔住みけん人の殊に心高く住みなして、巧みおける物ずき  
もなし。持佛一間を隔てて夜の物を納むべき處など聊かしつ  
らへり。さるを筑紫高良山の僧正は賀茂の甲斐何某が嚴子に  
て、この度洛に上りいまそかりけるを、ある人して額を乞ふ。い  
と易々と筆を染めて幻住庵の三字を送らる。やがて草庵の記  
念となしぬ。すべて山居といひ、旅寝といひ、さる器貯ふべくも  
なし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝  
は稀々とぶらふ人々に心を動かし、或は宮守の翁、里の男ども入  
來りて、猪の稻食荒し、兎の豆畑に通ふなど、我が聞知らぬ農談に、

罔雨

罔雨景ニ問ヒテ  
曰ク、曩ニ子行  
キ、今子止ル。  
曩ニ子坐シ、今  
子起ツ。何ソ其  
レ特操無キヤ。  
(莊子)

筆蹟

まつたのむ椎の  
木も有夏こ立  
はせを

樂天

唐の詩人白居易  
の字  
會昌六年(856)  
卒  
年七十五  
老杜  
唐の詩人杜甫  
太曆五年(755)  
卒  
年五十九

日已に山の端に懸れば、夜坐靜かに月を待ちては影を伴なひ、燭  
を乗つては罔雨に是非をこらす。

かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を隠さんとに  
はあらず。や、病身、人に倦んで、世を厭ひし人に似たり。つら  
つら年月の移りこし拙き身の科を思ふに、ある時は仕官懸命の

まつたのむ椎の木も有夏こ立

筆 蕉芭尾松

地を羨み、一た  
びは佛籬祖室

の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を  
勞して、しばらく生涯の計とさへなれば、終に無能無才にして、こ  
の一筋につながる。樂天は五臓の神をやぶり、老杜は瘦せたり。  
賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖處ならずやと思  
ひ捨ててふしぬ。

まづ頼む椎の木もあり夏木立

(芭蕉全集 猿蓑集)

一〇 宇治行

谷口蕪村

谷口蕪村

俳人・畫家  
天明三年(1813)  
歿  
年六十七  
宇治山  
京都府宇治郡に  
ある喜撰嶽  
田原  
京都府綴喜郡宇  
治田原村  
高尾村  
宇治田原村の内

宇治山の南、田原の里の山深く、茸狩し侍りけるに、若きどちはえ  
ものを貪り先を争ひ、余ははるかに後れて、こゝろ靜かにくまぐ  
まさかしもとめけるに、昔の小笠ばかりなる松茸五本を得たり。  
君見よや拾遺の茸の露五本

最高頂上に人家見えて高尾村といふ。汲鮎を業として世わた  
るたよりとなす由。茅屋雲に架し斷橋水に臨む。かゝる絶地  
にもすむ人ありやと、そゝろに客魂を冷やす。

鮎落ちていよく高き尾上かな (蕪村文集)

水原秋櫻子  
名は豊

醫師・俳人  
醫學博士  
宮内省侍醫寮御  
用掛  
明治二十五年(二  
五)東京生

一一 俳句の詩形

水原秋櫻子

俳句は詩型として最も短いもので、五音・七音・五音の三句から成る句數律を持つてゐる。その句數律は我々が極めて自然に馴親しんで來たもので、或感激を詠まうとする時に、おのづから律となつて流れ出るところのものである。我々は自分の感激を安心してこの律に託して詠むことが出来る。

しかし、この五・七・五といふ三句の句數律が何故に最もよい律であるかといふことを究めるのは非常に難儀なことである。これに關する完全な解答はまだ無いのであるが、日本詩歌論といふ本を読むと、そのことが詳しく説明されてゐる。今こゝにその説を要約して見ると、我々が一呼吸する時間と十二音を發音する時間とはほゞ同じであるから、まづ一息に十二音を發音し、

日本詩歌論  
渡邊吉次著

次いで五音を發音することは生理上から言つてまことに快適である。而してその十二音は續けて發音するよりも二つに區劃して發音する方がよい。これは人間の聽覺が、八音以上の音數を受取る場合、これを二部分に分けぬとその音數を計算することが出來ぬためである。つまり十二音を二部分に區劃しつ一つ一呼吸の間に發音するのである。十二音を二部分に區劃するには五音と七音、四音と八音、三音と九音、二音と十音、一音と十一音等の比例が出来るが、五音と七音以外の比例は皆均衡が取れぬために音律を成すことが出來ず、唯五音と七音の比例のみが音律を成す。これが五・七・五の三句より成る詩型の最も親しまれる理由だといふのである。我々は現在のところこの説明で満足するより仕方がないことと思ふ。

しかし本當のことを言へば、かういふ説明も不要な程、我々は五七五といふ定型の律に馴れきつてゐる。我々は呼吸すると同じほどの氣安さで、この定型律の詩を詠むことが出来るのである。それは前述の説明以上に深い根柢があつて、我々の心とこの定型律とを結び付けてゐるためであらう。かくの如く定型の律に従つて、句を詠むことは、一應やさしいのであるが、次第に詠みなれてゆくと、そこに又一つの不満が生れて来る。それは律の上で定型がある上に、表現の上にも或種の型を生じて來ることである。たとへば始の五音(これを第一音節といふ)で「〇〇や」といふ表現が屢用ひられる。又中の七音(これを第二音節といふ)では、名詞や動詞の後に同じ「や」といふ感動の助詞を置く表現が用ひられる。終の五音(これを第三音節といふ)は「かな」「けり」

で結ばれることが多い。つまり俳句の表現は俗に「やかな」といはれる程で、「や」「かな」を使へば誰でも形だけは整へることが出来るほどのものである。これは最も簡単な表現の型であるが、次第に修練を積んで來ると、二三十種の型のあることをすぐに覺え、それに當てはめて作ると、とにかくひと通りの句は出来るやうになる。例をあげて説明しよう。

明月や葎むらの中の水たまり                      西山泊雲

この句は佳句であるが、第一音節を「や」で切り、第二音節に「〇〇」の中の「と」置き、第三音節を名詞で止めることは極めて眞似しやうい表現の型で、從來非常に多く用ひられてゐる。

蒼空あそらの松のまつの雪計ゆきけや光悦寺                      野村泊月

有名な古寺の景などを詠む場合に、寺名は前書で現すに止めた

西山泊雲

名は亮三  
酒造家・俳人  
明治十年(一五七)  
京都府生

野村泊月

俳人  
明治十五年(一五七)  
京都府生

方がよいと思ふが、その寺名が五音である場合には、これを第三音節に置くとまことに坐りがよい。さうして第二音節の終を「や」で切ると、こゝに又一つの表現の型が生れる。これも亦從來屢々用ひられてゐる。

秋水の水馬とはなりにけり 池内たけし

この「と」はなりにけりも使ひ易い型の一つである。巧に用ひた場合はこの句の如く一種の淡々たる風格を生ずるが、濫用された場合は實にみじめな句が出来あがる。

暗き夜や伊豆の山火と漁火と 鈴木花蓑

「と」を重ね用ひた型である。これも随分使ひふるされ、數多の悪作を遺してゐる。この句などはまづ成功してゐるものの一である。

池内たけし  
名は洗  
俳人  
明治二十二年(三  
五)愛媛縣生

鈴木花蓑  
名は喜一郎  
俳人  
明治十四年(一  
五)愛知縣生

子規  
正岡子規  
名は常規  
俳人・歌人  
伊豫國(愛媛縣)  
生  
明治三十五年(二  
五)歿  
年三十六

内藤鳴雪  
名は素行  
俳人・漢學者  
伊豫國(愛媛縣)  
生  
大正十五年歿  
年八十

以上引例した句は大正昭和時代の作であるが、それ以前にも勿論かくの如き型は無數にあつた。殊に子規時代の句には、第一音節を「や」で切り、第三音節を名詞で止める型や、第二音節を「や」で切り、第三音節を名詞で止める型が非常に多い。例へば

行水や背中に戦ぐ櫓の影 正岡子規

律院の苔の光りや春の雨 同

春雨や葎の宿の白拍子 内藤鳴雪

清水ある家の施薬や健胃散 同

の如き類である。かういふ作を捜せば、枚舉するに遑のない程である。

いつたい俳句の表現は、決して一定の型にはまるべきものでない。作者一人々々の感情が異なる如く、表現も亦各、独自のもの



があるべき筈である。一人の作者の句でも、感情の高低によつて皆異なる表現を持たなければならぬ。それを或一定の型にはめて作句する時は、作者の感情はその輝きを失ひ、句は全く獨自性のないものとなる。即ち詩としての價値は非常に低下するのである。

この情態に嫌らずして新傾向運動が起り、それが幾多の變遷を経た後、今日では定型俳句に對峙する自由律俳句といふものになつてゐる。それ故自由律俳句の建前は、感情の異なるに従つて表現も異なり、如何なる型にも捉へられまいとすることにあらざる譯である。しかしこの自由律俳句の作者たちの理想は果して達成されたかどうか。それは遺憾ながら實現するに至らぬうちに、自由律俳句はまた自己の領域内に多くの表現の型を作

つてしまつたのである。

この事に就て私は昭和九年十二月號の「俳句研究」に書いたことがある。その時私は「層雲」の同年度十月號と十一月號とを材料にしたのであるが、その二箇月間に發表された句の中から、次の如き表現の型を拾ひ出すことが出來た。

もう湖明りも暮れた牛小屋の牛で  
くちなしの花嗅いでやめない看護婦さんで  
夕日の海を遠くに山の氷店の旗で

これは終を「で」で止めた型であるが、この「で」を二つ重ねた次のやうな型もある。

碧さきはまつて空は眞晝で満開のお花畑で  
發車には間がある運轉手と車掌でなきつく蟬で

俳句研究  
俳句に關する月  
刊雜誌  
層雲  
萩原井泉水の主  
宰する俳句雜誌

ともすればはづれる臙臙でみんな裸で  
次の型はやはり「で」の變型で、まづ名詞を置いて一度切り、それに  
續けた敘述を「で」を以て止めたものである。

炎暑、直線の重壓に耐へてゐる架橋作業で

鳩、いそぐと務めにでて行く私で

かりがね、宿舍割のきまつた兵隊さんで

最後にもう一つ、相當長い敘述をして一度切り、あとを一字の名  
詞で止める型がある。

青田が山からだんだんで人がくる、朝

よなべの機械が一枚々々紙を引いてゐる、夏

砂のうごいてゐるのが湧いてゐるので、秋

かくの如き表現の型に當てはめて句を作つてゐるのは、明らか

に自由律の建前に反するもので、定型律の作者たちが歩いた安  
易道を自由律の作者もまた歩いたことになるのである。私は  
僅か二冊の「層雲」を見てこれだけの型を拾ひ出したのであるか  
ら、數年間の「層雲」に眼を通せばもつと多くの型を指摘し得るに  
違ないと思ふ。

多くの作者の集るところ、表現の型を生ずるのはまことにやむ  
を得ないことである。然し型を生ずることを嫌つて定型律を  
見捨てた人々が、定型律と同じ轍を踏むのは、わざ／＼定型律を  
捨てた意義を没却するわけである。

私が俳句を作り始めたのは、大正八年であるから、自由律の人々  
が最も盛に活動してゐた頃である。その時代の定型律に於て  
は原石鼎、飯田蛇笏、前川普羅等の優秀なる作者がゐり、独自の表

原石鼎

名は鼎

俳人

明治十九年(五四)

鳥根縣生

飯田蛇笏

名は武治

俳人

明治十八年(三四)

山梨縣生

前川普羅

名は忠吉

俳人

明治二十三年(二)

東京生

現を以て清新なる句風を見せてゐたにも拘らず、多くの作者はなほ型による安易の道を踏んで居り、その後も幾つかの型が次次流行して行くやうな有様であつた。

しかし定型律の作者たちも遂に目ざめる時が來た。私等は定型律を守りつゝ、作者独自の感情を表現する手段はないものかと考へて見た。さうして終に調べによつてそれが可能であることを知つたのである。

現代の定型律俳句に於ても幾種かの表現の型はあるけれども、それによつて句を作つてゐるのは初學時代の作者及び退嬰的の考を抱く作者たちだけである。勉強盛りの作者たちはすべて型をかなぐり捨て、獨自の新表現の發見に向つて進んでゐる。それゆゑ現代の作品は子規時代の作品と全く異なる表現を持

春夏秋冬  
子規の選した新  
作の句集  
明治三十四年刊

つに至つた。子規の選した春夏秋冬を讀んだ後、直に現代の句集を手にとれば、その表現の相違のはげしさに驚異の眼を見はらぬ人は少いであらう。

かくの如き表現上の努力は十七音定型律の天地を非常に擴大した。即ち我々は俳句の天地を今までよりも遙かに廣く感じ、自由自在に振舞ふことが出来るやうになつた。しかも我々は定型律を一步も踏みはづして居らぬ。恰も空氣を呼吸するが如き快適さをもつてその規定の中に住してゐる。定型律を必要とする理論はまだ確立して居らぬけれども、我々は物心のついた頃より持つ親しみと、努力によつて擴げた天地の廣さとに安んじて、我々の心を託することが出来るのである。

(現代俳句論)

### 三 現代の文學

明治維新の後、文教普く國內に及び、文化絶えず海外より入りて、我が國社會百般の事物は、古今未曾有の發達を遂げぬ。殊に印刷術の進歩に伴ひて、文學界にも正しく一大轉機を來せり。而して傳統的なる東洋文化の精神に科學的なる西洋文化の思想を同化して新に日本的なるものを創造せんとする所に、我等は現代文學の意義と理想とを發見せざるべからず。

願ふに明治二十年頃までは、歐化主義極端に行はれ、英國風の功利的傾向と、基督教的愛の精神と、自由民權の思想とによりて、日本在來の文物思想は殆ど破壊せられんとせり。然るにその反動はやがて來りて、國民的自覺の念次第に高まり、或は啓蒙的國粹主義の運動となり、或は思索的日本主義の提唱となれり。凡

そかくの如き國粹主義的機運は、所謂浪漫主義の時代を一貫して動けるものなりしが、その浪漫主義は、明治三十四・五年ごろに至りて漸く頽廢し、思想界は三たび轉じて自然主義の勃興を見たり。即ち唯物的なる實證主義と科學的精神との影響を受けて、浪漫的なる幻影偶像の美は一切これを破壊し、總べて眞なる者への探求に邁進せんとする風は、盛に評論・創作の上に現れ來れり。勿論一方にはこれと相並びて、しかも全然別途の趣味・主義に據れるものありしかども、日露戰役前後より明治末期にかけては、實に自然主義の黄金時代を呈せり。かくて大正の代に入るや、泰西諸文豪の思想新に輸入せらるゝあり、或はこれに據りて自然主義に抗するものありしかば、さしもの自然主義も遂に再び振はずなりぬ。乃ちこれに代れる大正の文學思潮の中

には、新理想主義、新現實主義、新技巧派等を數ふべし。已に昭和に入りては、作者の群と讀者の層とによつて、更に何々派といひ、何々文學と稱するもの紛々錯綜し、文壇の推移變轉、實にその極まる所を知らざるなり。

以上は、明治以後常に文壇の主流を成せる小説を中心としての思想的概觀なれども、他の種の文藝に於ても、亦大體は同様なる思潮によりて變遷せるを見るべし。以下各項を別にしてその要を述べんとす。

一 長詩・短歌・俳句

明治の初期、和歌・俳句は未だ陳套を脱せざるに、夙くも歐米の詩の影響を受けて、長詩の新形式は創始せられぬ。所謂新體詩これなり。外山、山等の著に新體詩抄一卷を存す。爾後島崎藤

外山、山  
文學博士外山正一

蒲原有明  
名は華雄

村・土井晚翠・蒲原有明・薄田泣菫等各、その特色を發揮せり。大正昭和に入りて新體詩の名は長詩と改められ、内容を重んじて形式を自由にし、口語を以てする童謡・民謡の類も現れて、斯界の發展目覺しきものあり。

桂園の流

桂園香川景樹の  
歌風

高崎正風  
御歌所長

與謝野鐵幹  
名は寛



島和歌は、當初桂園の流を汲める高崎正風を中心として、國學者系統の歌人多かりしが、落合直文に至村つてこれが革新を企て、その門下

園等著れたり。別に正岡子規は萬葉調を鼓吹して、後の島木赤彦・藤茂吉等、アララギ一派の基礎を築けり。佐佐木信綱は詠歌よりも寧ろ歌學上の業績を大なりとす。又一方に人生派と

も謂ふべき石川啄木の出てたるは、自然主義の影響と見るべし。而して最近に至りては各派共に創作のみならず、相互の評論に、古歌の講究に、甚だ盛況を呈せり。

俳句も初期に於ては、天保の俗調月並流のみ行はれたりしが、正岡子規一度出づるや、種々の俳論を發表し、天明の蕪村を宗として幾多の新俳句を吟じ出せり。今日の學者、彼が未だ連



落合直文

句の價値を認めざりしを惜しむと雖も、その明治俳壇革新の功に至りては特筆するに足る。高濱虚子、河東碧梧桐、内藤鳴雪、夏目漱石等何れもその一派たり。碧梧桐は後に新傾向句を唱道

河東碧梧桐  
名は兼五郎

し、虚子は子規派を繼いで今日に及べり。尙この他二三の流派を數ふる中に、全く從來の季題趣味を脱して、自由に觀照世界の一闪を吟ぜんとする荻原井泉水の一派あり。顧ふに俳句は、江戸時代以來その作者及び鑑賞者として最も多數の民衆を擁せる點に於て、眞に日本獨得の文學と稱すべし。

坪内逍遙

二 戲曲

江戸末期より明治にかけて、戲曲界に活動したるは河竹默阿彌なり。されど、彼は寧ろ江戸歌舞伎の最後を飾れる作家なりと稱せらる。默阿彌の後に至りて、所謂史劇の勃興するあり、又新派



河竹默阿彌  
通稱吉村芳三郎

劇翻譯劇も出現したり。坪内逍遙は史劇作家の第一人者たるのみならず、更に多方面に互りて劇壇の革新を企て、業績誠に顯著なり。例へば明治の末期より大正の初年に及ぶまで、彼が主宰たりし文藝協會は、小山内薫が率ゐし自由劇場と共に、演劇の實際的啓蒙運動に盡くせる所少からず。又沙翁の翻譯劇、性格劇、樂劇、兒童劇等の創作も枚舉に遑なし。尙翻譯劇に於ては、森鷗外等に北歐獨逸の社會劇その他の紹介あり。必ずしも悉く實演せられしにはあらざれども、これらが我が劇界に新機運を將來せるは事實なり。また中村吉藏、菊池寛、山本有三等の作には、新劇として評價せらるゝものあり。別に岡本綺堂、眞山青果等も亦劇作家として名高く、殊に今日實演せらるゝものに屢その作を見る。要するに、舊來の歌舞伎劇と以上説ける如き新劇

とは、更に最近盛に行はるゝ、映畫劇と共に、我が劇界現下の三勢力にして、これらが將來如何に交渉し、如何に消長し行くかは興味ある問題なるべし。

### 三 小説

小説界も戯曲界と同じく、明治の初期には江戸戯作者の亞流たる假名垣魯文等の作行はれ、次いで政治小説興り、更に翻譯小説現れたり。魯文の作にては西洋膝栗毛名高し。政治小説にては矢野龍溪の經國美談、東海散士の佳人之奇遇等最も聞え、翻譯小説としては坪内逍遙の慨世士傳、關直彦の春鶯囀等あり。これらはそれ〴〵作風を異にすれども、皆何等かの意味に於て當年の歐化主義を反映したり。しかも何れも一種の傾向小説と稱すべく、未だ文學としての眞價を論ずべからず。その小説と

假名垣魯文  
野崎文藏

矢野龍溪  
名は文雄  
東海散士  
柴四郎

しての本質を認識し、現實主義的の作品を見るに至りしは、逍遙が小説神髓を著して新文學論を唱道し、之に次いで作品當世書生氣質を公にしたる後の事に屬す。二葉亭四迷の作も亦この小説界の革新を助成したり。

四迷と同時代に尾崎紅葉、山田美妙齋あり。紅葉の流に小栗風葉、泉鏡花等あり。この外にありて、しかも紅葉と並稱せられし幸田露伴、森鷗外の名も逸すべからず。かくて所謂逍遙、紅葉、紅露の四家は各特色ある作家として明治文學史を飾れり。

以上の諸家に對して、自然主義の旗幟を翻せるは、小杉天外を先



尾崎紅葉

山田美妙齋  
名は武太郎  
小栗風葉  
本名は加藤磯夫  
泉鏡花  
名は鏡太郎

小杉天外  
名は爲談

田山花袋  
名は鏡彌  
正宗白鳥  
名は忠夫

白樺派  
明治四十三年武  
者小路實篤を中  
心として、早見  
舞・志賀直哉等  
の起して新理想  
主義の一派

驅とし、これに繼げるを國木田獨歩、島崎藤村、田山花袋、正宗白鳥等とす。尙これらと並行して餘裕派と稱せらるゝ夏目漱石あり、耽美派と呼ぶるゝ谷崎潤一郎あり。殊に漱石は、自然派が動もすれば人生苦の暗澹たる方面を描寫せるに對して、理智的な態度に一脈のユーモアを存し、所謂則天去私を標語として非人情の美を説ける所に一特色を有す。又、新理想主義の人々は、漱石よりも更に積極的に自然主義と相容れず、人生に對して明らかなる肯定的態度を持ち、人類の幸福は各自内部の生命力によりて無限にこれを得べしとせり。謂はゆる白樺派の藝術は即ちこれにして、泰西の文學、哲學の感化に據れる所多し。これと同時に起れる新現實主義は、冷靜なる考察によつて、人生の現實相と人間心理との矛盾を諷刺し、或はこれに新解釋を與へん



里見弴  
本名は山内英夫

とするもの、芥川龍之介、菊池寛、志賀直哉はこれを以て名あり。新技巧派と稱するものも亦自然主義の無技巧を清算するため、に生ぜりと謂ふべく、里見弴、久保田万太郎等の作にその例を見る。以上は自然主義に代れる小説の瞥見なるが、尙大正の半ばを過ぎて無産派の發生を見たるは、世界大戦後の彼の地に於ける社會經濟思想の影響に因るなるべし。昭和に入りては、無産小説の起伏する一方に、純文學的なるもの、大衆的なるもの、幾多對立並存して、その全貌容易に端倪すべからず。今や日本の小説は、文體、修辭に於ては世界文壇に雄歩して遜色なしといふ。我等は今後内容の質に於ても、量に於ても、日本的にしてしかも世界的なる長篇大作の出現せんことを切望して止まざるなり。

島崎藤村

詩人・小説家  
帝國藝術院會員  
明治五年(二五三)  
長野縣生

一三 秋風の歌

島崎藤村

「さびしさはいつともわかぬ山里に

尾花みだれて秋かぜぞふく」

しづかにきたる秋風の

西の海より吹起り、

舞ひたちさわぐ白雲の

飛びて行くへも見ゆるかな、

暮影高く秋は黄の

桐の梢の琴の音に

そのおとなひを聞くときは、  
風のきたると知られけり。

ゆふべ西風吹落ちて、

あさ秋の葉の窓に入り、

あさ秋風の吹きよせて、

ゆふべの鶉巢に隠る。

ふりさけ見れば青山も

色はもみぢに染めかへて、

霜葉をかへす秋風の

空の明鏡にあらはれぬ。

清しいかなや、西風の

まづ秋の葉を吹けるとき、

さびしいかなや、秋風の

かのもみぢ葉にきたるとき。

道を傳ふる婆羅門の

西に東に散ることく、

吹き漂蕩す秋風に、

飄り行く木の葉かな。

朝羽うちふる鷺鷹の  
明暮天をゆくごとく、  
いたくも吹ける秋風の  
羽に聲あり、力あり。

見ればかしこし、西風の  
山の木の葉をはらふとき、  
悲しいかなや、秋風の  
秋の百葉を落すとき、  
人は利劍を振へども、  
げにかぞふれば限りあり。

舌は時世をのゝしるも、  
聲はたちまち滅ぶめり。

高くも烈し、野も山も  
息吹きまどはす秋風よ、  
世をかれくとなすまでは  
吹きも休むべきけはひなし。

あゝうらさびし、天地の  
壺の中なる秋の日や、  
落葉と共に飄る  
風の行方を誰か知る。

夏目漱石

名は金之助  
英文學者  
小説家  
江戸生  
大正五年  
年五十

一四 草 枕

夏目漱石

山路を登りながら、かう考へた。

智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ、とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、易い處へ引越したくなる。何處へ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、畫が出来る。

人の世を作つたものは神でもなければ、鬼でもない。やはり向ふ三軒兩隣にちらく／＼する唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば人てなしの國へ行くばかりだ。人てなしの國は、人の世よりも猶住みにくからう。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい處を、どれほ

どか寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。

こゝに詩人といふ天職が出来て、こゝに畫家といふ天命が降る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豊にする故に尊い。

住みにくき世から、住みにくき煩を引抜いて、有難い世界をまのあたり寫すのが詩である、畫である、或は音楽と彫刻とである。

こまかにいへば、寫さないでもよい、只まのあたり見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さずとも、響の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せんでも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。只おのが住む世を、かく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季濁濁の俗界を清くうら／＼かに收め得れば足る。

この故に、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、

カメラ  
暗箱

かく人生を觀じ得る點に於て、かく煩惱を解脱する點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得る點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩する點に於て、千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。



夏 目 漱 石

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして、明暗は表裏の如く、月のあるところにはきつと影がさすと悟つた。三十の今日は、かう思うて居る。喜の深きとき、憂愈深く、樂しみの大きな程、苦しみも大きい。これを切放さうとすると、身が持てぬ。

かたづけようとするれば、世が立たぬ。金は大事だ。大事なものゝ殖えれば、寝る間も心配だらう。閣僚の肩は數百萬人の足を支へてゐる、背中には重い天下がおぶさつてゐる。旨いものも食はねば惜しい。少し食へば飽きたらぬ、存分食へばあとが不愉快だ。

余の考がこゝまで漂流して來た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏損つた。平衡を保つ爲に、すはやと前に出した左足が、仕損じの埋合はせをすると共に、余の腰は工合よく方三尺程な岩の上におりた。肩にかけた繪の具箱が腋の下から躍りだしただけで、幸に何の事もなかつた。

立上る時に向ふを見ると、路から左の方に、バケツを伏せたやうな峯が聳えてゐる。杉か檜か分らないが、根元から頂まで、悉く

蒼黒い中に、山櫻が薄赤く、だんだんに棚引いて、つゞき目が確と見えぬ位、霧が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬき込んで眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭き平面をやけに谷の底に埋めてゐる。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへ、はつきりしてゐる。行く手は二町程で切れてゐるが、高い處から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難儀だ。土をならすだけならさほど手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平かにしても石は平かにならぬ。石は切砕いても岩は始末がつかぬ。搦崩した土の上に悠然と峙つて、吾等の爲に道を讓る景色はない。向ふで聽かぬ上は、乗越すか、廻るかしなければならぬ。巖のない處でさへ、歩きよくはない。

左右が高く、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿つて、その頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くといはんより、川底を涉るといふ方が適當だ。固より急ぐ旅ではないから、ぶら／＼と七曲へかゝる。

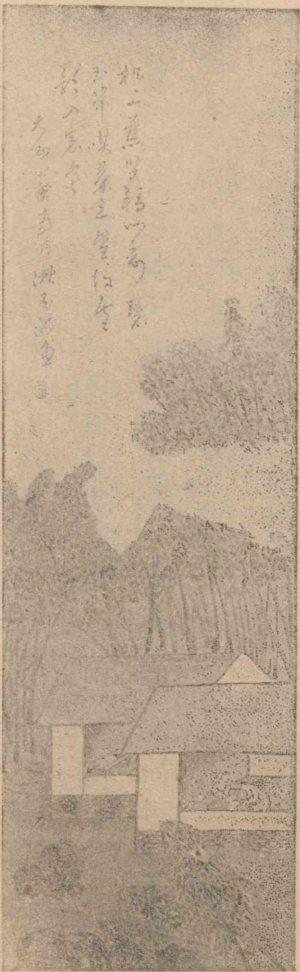
雲雀の  
雲雀より上にや  
すらふ峠かな  
(芭蕉)

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いてゐるのか、影も形も見えぬ。只聲だけが明らかに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されて、ゐたゞまれない様な氣がする。あの鳥の鳴く音には、瞬間の餘裕もない。長閑な春の日を鳴盡くし、鳴明し、又鳴暮さなければ、氣が濟まぬと見える。その上、何處迄も登つて行く、何時迄も登つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた擧句は、流れて雲に入つて、漂うてゐるうちに、形

は消えてなくなつて、只聲だけが空の裡に残るのかも知れない。巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆様に落ちる所を、際どく右へ切れて横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛揚つて來るの

筆蹟

机上蕉豎稿、門前碧玉竿、喫茶三盤後、雲影入レ窓裏。  
大正四年十一月漱石詩畫  
十文字  
時鳥鳴くや雲雀と十文字(去來)



夏日漱石筆

かと思つた。次には落ちる雲雀と揚る雲雀が十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に落ちる時にも、揚る時にも、また十文字にすれ違ふ時にも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を取ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。只菜の花を遠く望んだ時に、眼が覺める。雲雀の聲を聞いたとき、魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは、口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたものうちで、あれ程元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して、口の中で覺えた所だけ誦誦して見たが、覺えて居る所は二三句しかなかつた。その二三句のなかにこんながある。

前を見ては、後を見ては、物欲しとあこがるゝかな、われ。腹からの笑といへど、苦しみのそこにあるべし。

シェレー  
英國の詩人  
(西曆一九三二)

美しき極みの歌に、悲しさの極みの思、籠るとぞ知る。

なるほど、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の様に思ひ切つて、一心不亂に、前後を忘却して、わが喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論のこと、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ字がある。詩人だから萬斛で、素人なら一合で済むかも知れぬ。

して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神経が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜もあらうが、無量の悲しみも多からう。それならば、詩人になるのも考へものだ。

暫くは路が平で、右は雜木山、左は菜の花の見續けである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸の様な葉が遠慮なく四方へ伸して、真中に黄色な珠を擁護してゐる。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒なことをしたと振りむいて見ると、

黄色な珠は依然として鋸の中に鎮座してゐる。暢氣なものだ。又考を續ける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦しみもない。菜の花を見ても、只嬉しくて胸が躍るばかりだ。蒲公英もその通り、櫻も——櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ来て、自然の景物に接すれば、見るもの、聞くもの面白い。面白いだけで、別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば、足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。

しかし、苦しみのないのは、何故だらう。只この景色を一幅の畫として覽、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貰つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲する料簡も起らぬ。只この景色が——腹の足しにもならぬ、



月給の補にもならぬこの景色が、景色としてのみ余が心を楽しませつゝあるから、苦勞も心配も伴なはぬのだらう。自然の力は、こゝに於て尊い。吾人の性情を瞬間に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたり、人の世につきものだ。余も三十年の間、それを仕通して飽きくした。飽きくした上に、芝居や小説で同じ刺戟を繰返しては大變だ。余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。何處までも世間を出ることが出来ぬのが、彼等の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるか

ら、所謂詩歌の純粹なるものも、この境を解脱することを知らぬ。何處までも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じてゐる。いくら詩的になつても、地面の上を駈けあるいて錢の勘定を忘れるひまがない。シエレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理ではない。嬉しいことに、東洋の詩歌にはそこを解脱したのがある。

採菊東籬下  
晉の陶淵明の句

採菊東籬下、悠然見南山。

只それぎりの裏に、暑苦しい世の中を、まるで忘れた光景が出てくる。垣の向ふに隣の人が覗いてゐる譯でもなければ、南山に親友が奉職してゐる次第でもない。超然と、出世間的に、利害得失の汗を流し去つた心持になれる。

獨坐幽篁裏  
唐の王維の詩

獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯。深林人不知、明月來相照。

不如歸  
徳富蘆花の作

金色夜叉  
尾崎紅葉の作

桃源  
秦の亂を避けた  
人の隠れたとい  
ふ村

支那湖南省常德  
府の近くにある

王維  
盛唐の詩人  
乾元二年(七四九)  
卒

淵明  
名は潜  
晉の隱逸詩人  
元嘉四年(四二七)  
卒

年六十三

フアウスト  
ゲーテの傑作

ハムレット  
シェクスピアの  
傑作

只二十字のうち、優に別乾坤を建立してゐる。この乾坤の功徳は、不如歸や「金色夜叉」の功徳ではない。汽車、汽船、權利、義務、道徳、禮儀で疲れ果てた後、總べてを忘却して、ぐつすりと寢込むやうな功徳である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀にこの出世間的の詩味は大切である。惜しいことに、今の詩を作る人も、詩を読む人も、みんな西洋人にかぶれて居るから、わざ／＼暢氣な扁舟を浮べてこの桃源に溯るものはないやうだ。余は固より詩人を職業にして居らぬから、王維や淵明の境界を今の世に布教して廣げようといふ心掛も何もない。只自分には、かういふ感興が、演藝會よりも、舞踏會よりも、楽しみになるやうに思はれる。フアウストよりも、ハムレットよりも有難く考へられる。かうやつて

只一人、繪の具箱と三脚几とを擔いで、春の山路をのそ／＼歩くのも全くこれが爲である。淵明、王維の詩境を直接に自然から吸収して、すこしの間でも非人情の天地に逍遙したいからの：願。一つの……醉興だ。

勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情は、さう長く續く譯には行かぬ。淵明だつて、年が年中南山を見詰めてゐたのでもあるまいし、王維も好んで竹藪の中に蚊帳もつらずに寝た男でもなからう。やはり餘つた菊は花屋へ賣つて、生えた筍は八百屋へ拂ひ下げたものと思ふ。かういふ余もその通り、いくら雲雀と菜の花が氣に入つたつて、山の中へ野宿する程、非人情が募つては居らぬ。こんな處でも人間に逢ふ。ちん／＼端折りの頬被や、赤い腰卷

藤井紫影

名は乙男  
國文學者  
文學博士  
京都帝國大學名  
譽教授  
明治元年(五二)  
淡路國(兵庫縣)  
洲本生

元祿

東山天皇の御代  
(二四八—二六六)

元和偃武

後水尾天皇の元  
和元年(三五)五  
月大阪夏の陣の  
結果秀頼母子が  
自刃して豊臣氏  
が滅亡し天下が  
全く統一したこ  
とをいふ

の姉さんや、時には人間より顔の長い馬にまで逢ふ。百萬本の  
檜に取圍まれて、海面を抜く何百尺の空氣を呑んだり吐いたり  
しても、人の臭みはなかく、取れない。それどころか、山を越え  
て落ちつく先の今宵の宿は那古井の温泉場だ。(漱石全集—草枕)

### 一五 元祿の三文豪

藤井紫影

江戸時代に於ける文化の興隆を説く者、先づ指を元祿に屈す。  
げにや、元和偃武よりこゝに七十年、世は兵革の響を忘れて漸く  
泰平の光に浴し、草創擾亂の世相は方に轉回して整理安定の時  
代となり、數十年間、人々の心裡に鬱積したる精神的需要は種々  
の形態を取りて、今や春風膏雨の時を得、争うて蕾を破り、千紫萬  
紅目もあやに咲出でぬ。

井原西鶴

小説家

元祿六年(三五)

年五十二

松尾芭蕉

俳諧

伊賀の人

元祿七年(三六)

年五十一

近松門左衛門

淨瑠璃作者

享保九年(三六)

年七十二

貞享三年

靈元天皇の御代  
(三三〇)

古池の一句

古池や蛙飛びこ

む水の音

竹本義太夫

又筑後少掾とも

いふ

義太夫節の祖

正徳四年(三二四)

年六十四

元祿

元祿は文藝復興の時代にして、又その發生の紀元なり。かくて、  
その新に起れるものは勿論、再び興りしものも、皆清新の風に富  
み、生氣潑刺たり。元祿文藝の貴ぶべきは即ちこの點にあり。  
この時に當つて、中流以下の社會を相手とする俗文壇に三偉人  
を出せり。三偉人とは誰ぞや。浮世草紙の井原西鶴、俳諧の松  
尾芭蕉、淨瑠璃本の近松門左衛門是なり。この三人時を同じう  
して、各、特殊の方面に旗幟を翻し、名聲嘖々として天下を風靡せ  
り。西鶴が浮世草紙に得意の諸作を出しし貞享三年は、芭蕉が  
貞門談林の舊套に安んぜずして、古池の一句に正法眼を開き、近  
松が竹本義太夫の爲に始めて、出世景清を作りし時なり。この  
時、西鶴四十五、芭蕉四十三、近松三十四、年齢事業、兩つながら西鶴  
を以て先輩とすべきなれど、爾來、かれの筆を武家物、町人物に轉

じたるより觀れば、この三人が期せずして轉化の時期を同じくせるも奇なりといふべし。

蕉風俳諧の趣味は幽寂閑適を旨とす。浮世の利慾に眼を光らし、俗界の歡樂に足を空なる京阪の町人、いかでかこれに満足すべき。芭蕉が江戸を中心として風化を四方に及したるも、その門徒は多く士林・桑門の騷客より成れり。されば、彼をして、蕎麥と俳諧とは上方の風土に適せずと放言せしめたるも亦故なきにあらず。談林風は諧謔を旨とし、新奇を競ひ、俗耳を喜ばしむること遙かに蕉風の上にある。京阪は西山宗因起りてより久しくその根據地なりしも、流行時移りて漸く世人の厭倦を招けり。西鶴談林の驍將を以て浪華の重鎮たり。好んで人事を詠じ、小説的着想の佳句、往々誦すべきものあれども、西鶴の西鶴た

西山宗因

名は豊一

談林派俳諧の祖

天和二年(三三〇)

歿

年七十八

宇治加賀掾

本名は嘉太夫

淨瑠璃加賀節の

祖

正徳元年(三三二)

歿

年七十七

る本領は浮世草紙にあり。近松も亦俳諧を西鶴に問ふと稱せらる。されどその句殆ど傳はらず。この二人は固より芭蕉と俳諧を比すべきにあらず。唯二人者の著作中、その趣味・文法に於て、多少俳諧の影響あるを注目すべしとなす。西鶴、宇治加賀掾のために、唇の作あれど、淨瑠璃に於て、近松の敵にあらざるや言ふを俟たず。

この三子者、各、獨得の長技を揮うて、こゝに絢爛たる元祿文藝の花を東西の野に咲きみたましめぬ。芭蕉の清淡、西鶴の放縱、近松の溫雅、その人となりを異にするに随つて、文もまた高雅・輕雋・秀潤の別あれども、俱に一代の粹たるを失はず。元祿の文壇、國學に儒學に豪傑の士乏しからざりしかども、この三人なかりせば、その落莫意料の外に在りしならん。(近松門左衛門)

一六 奈良の庭籠

井原西鶴

昔から今に同じ顔を見るこそをかしき世の中。この二十四五年も奈良通ひする肴屋ありけるが、行きたびにたゞ一色に極めて、鮓より外に賣ることなし。後には人も鮓賣の八助とて、見知らぬ人もなく、それ〴〵に商の道つきて、ゆるりと三人口を過ぎける。されども大晦日に錢五百持つて、終に年をとりたることなし、口食うて一盃に雑煮祝うた分なり。

この男常々世渡に油斷せず、一人ある母親の頼まれて、火桶買うて來るにも、はや間錢取りてたゞは通さず。まして他人の事には、産婆呼んで來てやる烈しき時も、茶漬飯を食はずには行かぬものなり。如何に慾の世に住めばとて、念佛講仲間の布に利を

手貝の町  
今の奈良市手貝町

取るなどは、まことに死ねがな目くじろの男なり。これ程にしても彼のざまなれば、天の咎の道理ぞかし。そも〴〵奈良に通ふ時より、今に鮓の足は日本國が八本に極りたるものを一本づつ切つて、足七本にして賣れども、誰かこれに氣のつかぬ事にて賣りける。その足ばかりを松原の煮賣屋に、きまつて買ふ者あり、さりとは恐しの人心ぞかし。物には七十五度とて、必ず現る時節あり。過ぎつる年の暮に、足二本づつ切つて、六本にして忙し紛れに賣りけるに、これも穿鑿する人なく、賣つて通りけるに、手貝の町の中程に、表に菱垣したる内より呼込み、鮓二盃賣つて出る時、法體したる親仁じろりと見て、碁を打ちさして立出て、何とやら裾の枯れたる鮓と、足の足らぬを吟味し出し、これは何處の海より上る鮓ぞ、足六本づつは神代このかた何の書にも見

えず、不便や今まで奈良中の者が、一盃くうたであらう、魚屋顔見知つた、といへば、此方のやうなる、大晦日に碁を打つてゐる所では賣らぬ、と言分してぞ歸りける。その後誰が沙汰するともなく世間に知れて、さるほどに狭い所は隅から隅まで、足切り八助といひふらして、一生の身過のとまること、これおのれが心からなり。



井原芳賀一筆  
西品一筆

されば大年の夜の有様も、京大阪よりは格別靜かにして、萬の買ひがかりも、ある程は隨分濟まし、この節季にはならぬと謝りいへば、掛取聽届けて、二度來

大乘院  
奈良興福寺の寺中

ることなく、差引四時切に奈良中がしまうて、はや正月の心。家庭竈とて、釜かけて焚火して、庭に敷物して、その家内、旦那も下人も一つに樂居して、不斷の居間は明けおきて、所慣はしとして輪に入りたる丸餅を、庭火にて焼き食ふも、賤しからずふくさなり。さて又都の外の宿の者といふ男ども、大乘院門跡の家來因幡といへる人の許にて、例に任せて祝ひ初め、富々、富々、といひて、町中を駈廻れば、家毎に餅に錢添へてとらせける。これを思ふに、大阪などにて厄拂に同じ。漸く夜も明け方の元日に、俵迎、々々と賣りけるは板に押ししたる大黒殿なり。二日の曙に、惠比須迎とて賣りける、三日の明け方に、毘沙門迎とて賣りける、毎朝三日が間福を賣るぞかし。さて元日の禮儀、世間の事はさしおきて、先づ春日大明神へ參詣いたすに、一家一門末々の親類までも引連

くらがり峠  
暗峠  
奈良から大阪へ  
通る舊街道で生  
駒山脈を横ぎる  
峠

れさゝめきける。この時一門の廣き程外聞に見えける。何國にても富貴人こそ羨ましけれ。商賣の晒布は、年中京都の吳服屋に懸賣りて、代銀は毎年大暮に取集めて、京を大晦日の夜半から我さきに仕舞ひ次第に松明點し連れて南都に入込む、晒布の銀何千貫目といふ限りもなし。已に奈良へ歸れば、皆々夜明になれば、金銀藏に打込み置き、正月五日より互に取遣りの差引すること例年なり。この銀荷を心懸けて、大和の片里に忍びて住みける素浪人ども、年とりかぬることの悲しさに、命を捨てて四人内談して、追剝に出でしに、皆三十貫又は五十貫目の大分にて、望み程の端銀なければ、それかこれかと見合はすれども、終に酒手といひかかねて、この道かへてくらがり峠に出て、大阪よりの歸を待伏せし所に、小男のかたげたる菰包を、心にくし、重き物

徳兵衛

大阪本天満町の

油商

河内屋の主人

與兵衛の繼父

氣もつかず

こなたへ来る徳

兵衛の姿を見て

與兵衛が豊島屋

の店先に身を忍

ばせたことに

豊島屋

河内屋と同町内

の油商

七左衛門

豊島屋の主人

天満

今の大坂市の川

崎・曾根崎・中

之島一帯

を輕う見せたるは、隠銀に極まる所とて、抑へて取つて逃げ去れば、この男聲を立てて、明日の御用にはとても立つまい、立つまいと申す時に、四人して明けて見れば、數の子なり、これはこれは、

【圖算用】

一七 粽一把に錢五百

近松門左衛門

徳兵衛は氣もつかず、豊島屋のくゞりそつとあけ、七左衛門殿、お仕舞か。と、つつと入れれば、是はくゞ徳兵衛様。こちのはまだ仕舞はず、天満の果までいかれます。わたしは取紛れお見舞も申さぬに、よろこそくゞ。この際は與兵衛様の事につき、いかにお世話でござんしよ。と、蚊帳より出づれば、さればくゞ。こなたは幼い娘御たちの世話。我等は成人の與兵衛に世話をやく。何れ

與兵衛  
河内屋徳兵衛の  
次男

挿版

かまはずばう判  
似せ判一貫匁の  
銀に十貫匁の手  
がたして一しや  
うの首つながら  
るためしも有事  
と思ひながらう  
みの母の追出す  
をまゝてゝの我  
らけいはくらし  
うとめられず聞  
ばじゆんけい町  
兄が方にあると  
やらもし此あた  
りへらる

順慶町兄  
河内屋太兵衛  
與兵衛の兄

の道にも子に世話をやくのは親の役、苦勞とも存ぜねども、引附  
けて一所に在る中は氣も落着く。あの様な無法者を勘當すれ  
ばやけを起し、あす火に入るも構はず。謀判、廣判、一貫匁の銀に  
十貫匁の手形して、一生の首繋がるゝ例も有ることと思ひなが

多岐路を歩むは  
命を懸けて  
此世を渡る  
事なり  
此世を渡る  
事なり  
此世を渡る  
事なり

七行淨瑠璃版木

ら、生みの母の追出すを、繼父の我等輕薄らしうとめられず。聞  
けば順慶町兄が方にあるとやら。もしこの邊へうろたへて見  
えましたら、七左衛門殿夫婦言ひあはせ、父親は合點、隨分母に詫

お澤

徳兵衛の妻

本親

太兵衛及び與兵  
衛の實父先代徳  
兵衛

今の徳兵衛は先  
代死亡の折實直  
を見込まれてそ  
の跡へ直された  
番頭である

お吉

豊島屋七左衛門  
の妻

今宵

端午節供の前日  
即ち五月四日の  
宵

言致し、どしやう骨入れかへ、再び内へ戻る様に御意見偏に頼み  
入る。こちらの女房お澤が一家一門皆侍。そのならはかしか、  
思ひ切つては見返らず、義理固い生れつき。それに似ぬ道樂者。  
本親の旦那も行儀づよく、義理も情も知つたる人。二人の子供  
に心を盡くすは皆故旦那への奉公。今與兵衛めを追出し、一生  
荒い詞も聞かぬ親方に、草葉の陰より恨を受くる無果報はこの  
徳兵衛一人。推量なされ、お吉様と、煙草に涙紛らして咽せかへ  
るこそ道理なれ。「うん、思ひやりました。こちのも追つつけ歸  
られう。逢うてお話をされませ。」いや、いづかたも今宵の  
こと、萬事のお邪魔。これこの錢三百、女房が目顔を忍び、つい懷  
へ入れて出た。與兵衛めがうせたらば、追つつけ暑氣に赴く。  
さつぱりと肌の物でも買ひをれ。」と、ゆめ〜我等の名を出さず、



かまがわせた  
根性曲りの人が  
来た

ひづめ  
引詰め

七左殿の心附か、どうなりとも御氣轉頼み入る。と差出す。  
後の門口「お吉様、お仕舞か」とおとづる、は女房お澤が聲。徳兵衛  
衛びつくり、はつ、逢うては氣の毒。隠れたい。率爾ながら御免  
なれ。と隠る、蚊帳の後影。「これ、徳兵衛殿、我が女房に隠る  
るとは何事」と聲かけられて夫も敗亡、お吉もどまぐれ挨拶なく、  
外には與兵衛、さあ母のかまがわせた。何いはる、と樞の孔、耳  
を附けてぞ聞きゐたる。

女房お澤腰打掛け、のう徳兵衛殿内の事はそこ、互に忙し  
い際の夜さ、こゝへは何の用がある。うん、又與兵衛めがこと悔  
みにか。いかにまゝしい子なればとて、あんまりに義理過ぎた。  
眞實の母が追出すからは、こなたの名の立つことはない。この  
三百の錢、のらめにやるのか。つね、に身をひづめ、始末して

紙衣  
厚い白紙に柿の  
澁をひいて乾か  
しこれを揉んで  
柔かにしたもの

彼奴にやるは淵へ棄つるも同然。そのあまやかしが皆毒飼。  
この母はさうでない。さあ勘當といふ一言口を出づるがそれ  
限り。紙衣着て河へはまらうが、  
油塗つて火にくばらうが、うぬが  
三味、悪人めに氣を奪はれ、女房や  
娘は何になれ。さあ、先へい  
なつしやれ。と引立つる袖を振放  
し、え、か、むごいぞや、さうでな  
い。生れ立から親はない。子が  
年寄つて親となる。親の始は皆  
人の子。子は親の慈悲で立つ、親は我が子の孝で立つ。この徳  
兵衛は果報少く、今生て人は使はずとも、いつても相果てし時の



近松門左衛門  
保坂酒次藏

おかし  
河内屋の娘  
徳兵衛の實子

周利槃特  
物のわからない  
鈍物であつたが  
後には釋迦に救  
はれた

葬禮には、他人の野送百人より、兄弟の男子に先輿、後輿舁かれて、あつばれ死に光やらうと思つたに、子は有りながらそのかひなく無縁の手にかゝらうより、いつそ行倒れの釋迦荷なひがましでおぢやるは」と又むせかへるぞあはれなる。「あ、與兵衛めばかりが子ではない。兄の太兵衛、娘なれどもおかしはこなたの子でないか。さあ〜早う先へ」と押出す。「はて、いぬるなら連立たう。そなたもおぢや」と引立つる母の袷の懷より、板間へぐわらりと落ちたは何ぞ。粽一把に錢五百。

「のう情なや、恥づかし」と我が身を覆ひ、押隠し、聲をあげ、徳兵衛殿眞平免して下され。これは内の掛の寄り、與兵衛めにやりたいばかり、わしが五百盗んだ。二十年添ふ中、隔心隔ての有るやうに情ない。たとへあの悪人めがお談義に聞く様な周利槃特の

阿闍世

中印度摩訶陀國  
の王  
父王を牢死させ  
母を監禁した  
後佛弟子となり  
第一結集を保護  
大成せしめた

祝ひ月  
正月五月九月は  
月の月としそれ  
を忌んでわざと  
祝ひ月ともいふ

阿房でも、阿闍世太子の鬼子でも、母の身でなんのにくからう。いかなる悪業悪縁が胎内に宿つてあの通りと思へば、不便さかはいさは父親の一倍なれども、母がかはい、顔しては、隔てた心に、あんまり母があいだてない。強張が強うて、いよ〜心が直らぬ。と、さぞ憎まるゝは必定と、わざと憎い顔して、撲つつ叩いつ、追出すの勘當のと、むごう辛う當りしは、繼父のこなたにかはいがつてもらひたさ、これも女の廻り智慧、免して下され、徳兵衛殿。わしに隠してあの錢をやつて下さる志、詞ではけん〜と慳貪に、いうたれど、心で三度頂きし。何を隠さう、あいつは立派好もするやつ、取りわけ祝ひ月、鬢附元結をと、のへ、人交はりもしたからう。生れてこの方節供々々祝儀缺かぬに、この月ばかり身祝ひもしてやりたさ。見苦しいこの恥辱をさらすも、お吉様頼

んで届けんため。まだこの上に根性の直る薬には、母が生贍を煎じて飲ませといふ醫者あらば、身を八つざきも厭はねども、一生夫の錢かね一文半錢ちがへぬ身が、子ゆゑの闇に迷はされ、盗みしてあらはれた。恥づかしうござる。とばかりにてわつと叫び入りければ、「道理々々」と夫のなげき、子を持つ者は身にこたへ、行くすゑ思ふお吉の涙、折からになく蚊の聲もいと涙を添へにけり。

「や、祝ひ日に心もない泣きわめき、不調法。その錢もお吉様頼み、與兵衛にやつてお暇申しや」といへども、女房涙にくれ、「こな様のやつて下さるその深い志に、盗んだ錢がなんとやらりよ。」はて大事な、ひらにやりや。「いや免して下され」と夫婦が義理のやる方なさ。お吉も涙止めかね、あゝお澤様の心、推量した。やり

にくい筈。こゝに捨てて置かしやんせ。わしが誰ぞよさそな人に拾はせましょ。「あゝ忝い。とてものおなさけ、この糝も誰ぞよさそな犬に喰はせて下さんせ」と又泣出す兩親の、心隔てぬ潜戸も子の不孝より落ちたる櫃、あけて夫婦は歸りけり。

(近松全集)

一八 枕草子鈔

清少納言

春は曙

春は曙。やうく、白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、螢飛びちがひたる。雨などのふるさへをかし。秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥の

清少納言  
平安朝時代の女  
流文學者  
枕草子の著者  
肥後守清原元輔  
の女  
一條天皇の皇后  
藤原定子に仕へ  
た

火桶  
圓火鉢の類

ねどころへゆくとして、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれな  
り。まいて雁などの列ねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。  
日入りはてて、風の音、蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめ  
て、雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、  
又さらでもいと寒き、火などいそぎおこして、炭もて渡るも、いと  
つきんし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃、火桶の  
火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

にくきもの

いそぐことある折に長言するまらうど。あなづりやすき人な  
らば、後にとて追ひやりつべけれど、さすがに心はづかしき人、い  
とにくくむづかし。硯に髪の入りに磨られたる。又墨の中に

加持  
病氣災難等を攘  
ふ爲に佛力の加  
護を祈る咒法



清少納言  
各口香燭

物のけに困じに  
けるにや、あるま  
まにすなはちね  
ぶり聲なる、いと  
にくし。なてふ  
ことなき人の、え

石のきし／＼ときしみ鳴りたる。俄にわづらふ人のあるに、  
者求むるに、例ある處にはなくて、他に尋ねありくほど、待遠に久  
しきに、辛うじて待ちつけて、喜びながら加持せさするに、この頃  
がちに物いたういひたる。火桶の火、炭櫃などに手の裏打返し  
打返し押延べなどしてあぶり居る者。いつか若やかなる人な  
どの、さはしたりし。老いばみたる者こそ、火桶のはたに足をさ

狩衣

もとは狩獵の時  
の布衣  
當時は六位以上  
の常服で絹製  
式部の大夫  
五位の式部大丞

へもたげて、物言ふまゝにおしすりなどはすらめ。さやうの者は、人のもとに來て、居むとする處を、まづ扇して此方彼方あふぎ散らして、塵はきすて、居も定らずひろめきて、狩衣の前、下様にまき入れても居るか。かゝることは、いふかひなき者のきはにやと思へど、少しよろしき者の、式部の大夫などいひしが、させしなり。また酒飲みて赤めき、口をさぐり、髯あるものはそれを撫で、盃こと人に取らすほどのけしき、いみじくにくしと見ゆ。「また飲め」などいふなるべし。身ふるひをし、頭振り、口わきをさへ引垂れて、童べの、國府殿こくふどのに參りて、など謠ふやうにする。それはしも、まことによき人の、し給ひしを見しかば、心づきなしと思ふなり。物羨みし、身の上嘆き、人の上言ひ、露ばかりのこともゆかしがり、

伊豫簾

伊豫國(愛媛縣)  
浮穴郡から出る  
細い條で編んだ  
すだれ  
帽額の簾  
上部に水引のあ  
る縁取の精製の  
簾  
遺戸  
横にあける引戸

聞かまほしがりて、言ひしらせぬをば怨じ譏り、又、わづかに聞きわたることをば、われもとより知りたることのやうに、他人たひとにも語りしらぶるも、いとにくし。物聞かむと思ふほどに泣くちこ。鳥の集りて飛びちがひさめき鳴きたる。伊豫簾など懸けたるをうちかづきて、さら／＼と鳴らしたるもいとにくし。帽額ぼうがくの簾は、ましてこはしの打置かるゝ、いとしるし。それも、やをら引上げて出て入るは、更に鳴らず。遺戸など荒くたてあくるもいとあやし。少し擡ぐるやうにしてあくるは、鳴りやはする。悪しうあくれれば、障子などもこほめかし、ほとめくこそしるけれ。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊の細聲にわびしげに名のりて、顔のほどに飛びありく。羽風さへ身のほどにあるこそ、いとにくけれ。きしめく車に乗りてありく者、耳も聞かぬにやあらむ

と、いとにくし。わが乗りたるはその車の主さへにくし。

また物語などするに、差出でて、我一人才まくる者。すべて差出は、童も大人も、いとにくし。あからさまに來たる子ども童べを見入れ、らうたがりて、をかきものなど取らするに、ならひて、常に來つゝ居入りて、調度や打散らしぬる、いとにくし。家にて、宮仕所にて、逢はてありなむと思ふ人の來るに、空寐をしたるを、我がもとにある者、起しに寄りきて、いぎたなしと思ひ顔に引きゆるがしたる、いとにくし。今參りのさし越えて物知顔にしへやうなることいひ、後見たる、いとにくし。鼻ひて誦文する。大方家の男をとこ主しやうならでは、高く鼻ひたる、いとにくし。蚤もいとにくし。衣のしたに躍り歩いて、もたぐるやうにする。又犬の諸聲に、長々と鳴きあげたる、まがくしくさへにくし。あけてい

誦文する

咒文を唱へること

と

クサメは即ちその咒文の一

紫式部

平安朝時代の女

流文學者

藤原宣孝の妻

一條天皇の中宮

上東門院に仕ふ

長元四年(九九一)

歿

年五十七

行平の中納言

在原行平

業平の兄

太宰權帥

寛平五年(三五三)

卒

年七十六

關吹きこゆる

旅人は快涼しく

なりけり關吹

きこゆる須磨の

浦風(讀古今集)

でぬる所たてぬ人いとにくし。めのとの男こそあれ、女はされど、近くも寄らねばよし。をのこ兒をば、たゞわが物にして、立ちそひ領じてうしろみ、聊かもこの御事に違ふ者をば、讒し、人をば人とも思ひたらず、怪しけれど、これが咎を心に任せて言ふ人もなければ、處得、いみじきおもゝちして事を行ひなどするよ。

枕草子

一九 須磨の浦波

紫式部

須磨には、いと心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、關吹きこゆる。といひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞えて、またなくあはれなるものは、かゝる處の秋なりけり。御前にいと人少にて、うち休みわたれるに、一人目をさまして、枕をそば

御前に  
光顯氏の

だてて四方の嵐を聞き給ふに、波たゞこゝもとに立ちくる心地  
して、涙落つとも覚えぬに、枕浮くばかりになりけり。琴を少  
し搔鳴らし給へるが、我ながらいと凄う聞ゆれば、弾きさしたま  
ひて、

こひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くら  
む

と歌ひ給へるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、忍ばれてあ  
いなう起きつゝ、鼻を忍びやかにかみわたす。

げにいかに思ふらむ。我が身ひとつにより、親兄弟かたとき立  
離れがたく、程につけつゝ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへる  
と思すに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふら  
むと思せば、晝は何くれと戲言うち宣ひまぎらはし、徒然なるま

まに、いろ／＼の紙をつぎつゝ、手習をし給ひ、珍しき様なる唐の  
綾などに、さまざまの繪どもを畫がきすさび給へる屏風の面ど  
もなど、いとめでたく見所あり。人々の語り聞えし海山の有様  
を遙かに思しやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたゞず  
まひ、二なく書き集め給へり。「このごろの上手にすめる千枝常  
則などを召して、作繪仕うまつらせばや」と、心もとながりあへり。  
懐かしうめでたき御有様に、世の物思忘れて、近う馴れ仕うまつ  
るを嬉しきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。

前裁の花いろ／＼咲亂れ、おもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊に  
出で給ひて佇み給ふ御さまの、ゆゝしう清らなるに、所がらはま  
してこの世のものとも見え給はず、白き綾のなよゝかなる紫苑  
色など奉りて、こまやかなる御直衣、帯しどけなく打亂れ給へる

御さまにて、釋迦牟尼佛弟子と名のりて、ゆるゝかによみ給へる、  
また世に知らずきこゆ。沖より舟どもの歌ひのゝしりて漕ぎ  
ゆくなども聞ゆ。ほのかに、たゞ小さき鳥の浮べると見やらる  
るも、心細げなるに、雁の連ねて鳴く聲、楫の音にまがへるを、うち  
ながめ給ひて、御涙のこぼるゝをかき拂ひ給へる御手つき、黒木  
の御數珠に榮え給へり。

はつかりはこひしき人のつらなれや旅の空とぶ聲のかなし  
き (中略)

彌生の朔日に出て來たる巳の日、今日なむかく思すことある人  
は御禊したまふべきとなまさかしき人の聞ゆれば、海面もゆか  
しくて出でたまふ。いとおろそかに軟障ゼリヤばかりを引きめぐら  
して、この國に通ひける陰陽師召して祓せさせたまふ。船にこ

巳の日  
三月上巳の節

とごとしき人形載せて流すを見たまふにも、よそへられて、

知らざりし大海の原に流れ來てひとかたにやはものはかな  
しき

とて居たまへるさま、さる晴に出でて、言ふよしなく見えたまふ。  
海の面はうらくと風ぎわたりて、行方も知らぬに、來し方ゆく  
先思しつゞけられて、

八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなけれ  
ば

と宣ふに、俄に風吹出でて、空もかきくれぬ。御祓もしはてず、立  
騒ぎたり。肱笠雨とか降りきて、いとあわたゞしければ、皆歸り  
たまはむとするに、笠も取りあへず。さる心もなきに、よろづ吹  
散らし、またなき風なり。波いと巖イハしう立ち來て、人々の足をそ



らなり。海の面は衾を張りたらむ様に光り満ちて、雷鳴りひらめく。落ちかゝる心地して、辛うじてたどり来て、かゝる目は見ずもあるかな。風などは吹けど、氣色づきてこそあれ。あさましうめづらかなりと感ふに、なほやまず鳴りみちて、雨の脚あたる所通りぬべく、はらめき落つ。かくて世は盡きぬるにやと心ほそく思ひ感ふに、君はのどやかに經うち誦じておはす。暮れぬれば雷少し鳴りやみて風ぞ夜も吹く。多く立てつる願の力なるべし。今しばしかくだにあらば、浪にひかれて入りぬべかりけり。高潮といふものになむ、取りあへず人そこなはるゝとは聞けど、いとかゝることはまだ知らずといひあへり。曉がた皆うち休みたり。君もいさゝか寐入りたまへれば、その様とも見えぬ人來て、など宮より召しあるには参りたまはぬとてたど

君  
光源氏

り歩くと見るに、おどろきて、さは海の中の龍王のいといたるものめでするものにて、見入れたるなりけりと思すに、いとものむづかしう、この住居堪へがたく思しなりぬ。  
(源氏物語)

### 三 國文學の精神

久松 潜一

久松潜一  
國文學者  
文學博士  
東京帝國大學教  
授  
明治二十七年  
二月愛知縣生

國文學の精神は何であるか。或は月花をめるといふ優美な意味に取られてゐる場合も多いであらう。しかし、よく考へて見れば、もつと生活的意味の深い種々の方面があるに相違ない。私はこゝに國文學を流れる精神として、まこと、もののはれと、幽玄といふ三つの點について考へて見ようと思ふ。  
第一にまことの精神とは、あるがまゝのもの即ち事實があるがまゝに表現する精神を中心としてゐる。これが上古の國文學

を貫く精神であると見られると思ふ。これを内容的思想的方面から見ると、そこに強い國家的精神と個人的精神とが現れてゐる。國家的精神は古事記を中心として見られる精神で、この國家は神によつて作られ、宇宙も人類も亦神によつて作られたと見るのであつて、神を中心として生きる精神である。同じ神の中に自然神もあり、人格神もあり、人格神の中に英雄神もあり、祖先神もあり、色々であるが、何れにしても、自己より偉大なる神によつて生きる精神は、古代人の眞實なる心もちのまゝ、古事記に表現されてゐるのである。もとよりそこには想像もあり、超現實的なことも多いのであるが、後世の如く意識的に創作したものでなく、彼等に眞實なものとして映じたものがそのまゝに傳はつてゐるのである。

皇子  
天武天皇の御子  
草壁皇子・高市  
皇子など

さてまた萬葉集の中心となる精神は個人的の精神であると思ふ。人麿は國家の建設を説き、神を歌つてゐるが、その中心は皇子の薨去をいたむ哀痛の感情にある。かくて一方には自然に只管なる愛をむけるやうになり、自然の中に身を投入れて、そこに自己と自然との一つになつた境地が見られる。また一方には人生に向つて情熱的な愛をうたひ、或はこの人生の享樂すべきをうたひ、或ははかなき世であつても、現實にある間は現實をよりよく生きていかうとする、強い現實に對する愛をうたつてゐるのである。

この素樸な、まことの感情を中心とする上代人の物の見方を見つめていくと、第一に一元的綜合的である。神と人、自然と人を一つのものとしてながめる。第二に率直にして積極的である。

見方が單純で、迂餘曲折がない。第三に物を觀察するに多く具象的である。歌を詠むにも、目に觸れた事象を先づうたふ。對象をあるがまゝに直觀し、これを直接的に表現するのである。而してこの精神は、文化が爛熟したとき、復古的精神として常に現れて來るのである。復古的精神とは單に文字通り古に復るのではない、古代人の眞實性と素樸性との復ることがその精神である。例へば平安末期に於て、現實生活に頽廢と行きづまりとを生じたとき、實朝は萬葉集の精神に復つてその素樸性と眞實性を求めたのであると思ふ。かくて實朝の心境を見ると、一方には國家的精神が現れてゐる。

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめや  
も

一方には人間的な愛の精神が現れてゐる。

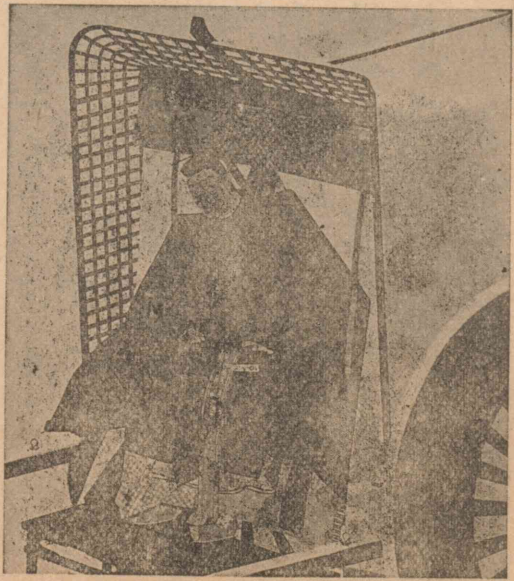
いとほしや見るに涙もとまらず親もなき子の母をたづぬ  
る

又自然をうたふにしても、實朝の歌は萬葉時代のやうにありのままを見つめる、そしてありのままに表現するといふ態度が現れてゐる。

第二に、ものあはれの精神は、ものの中に見出したあはれの精神である。あるがまゝのものの上に見出した、あるべき世界である。それは心と形との調和の中に見出される情熱の世界であるともいへる。本居宣長は、ものあはれを源氏物語の基調であるとし、又平安時代文學の基調としてゐる。それは上古文

學の中に見える素樸な感情ではなく、それをあくまで洗煉した境地である。あるがまゝのものからあるべきものを見出し、それを高揚せしめた境地である。高天原の岩戸の前の神樂に「あはれ、あなもしろ、あなたのし」とある「あはれ」である。

随つてそれは春の朝のほがらかな感情にも、秋の夕の寂しさの感情にも見出される。この精神が平安時代の文學のすべての上に見出される。これを歌の上に見るに、平安時代の歌は萬葉時代の



源實朝  
松岡映丘筆

やうに感情を直接的に表現するより、それを反省する所から、理智的傾向になる點がある。随つて、強烈なる感情を沈靜にし、情趣化する事にもなる。古今集の歌がそれである。そこに素樸的から技巧的な點も生ずると思ふ。平家物語は敘事詩的の物語であるが、勇壯な戦闘の間を色どつて流れてゐるものは、ものあはれの精神である。そしてそこに華やかな、沈痛な悲壯美を形づくつてゐると思ふ。

眞名序  
紀淑望撰

第三に、幽玄の精神を考へて見たい。古今集の眞名序に、或は事神異に關し、或は興幽玄に入る。とあつて、本來はものあはれとほゞ相近い意味であるが、平安末期の世相の轉變から人生の無常を觀じ來り、宗教的の考が深く入込んで、物寂しい境地を主と

俊成

藤原氏

歌人

皇太后宮大夫

千載集の撰者

元久元年（八四〇）

薨

年九十一

するやうになつた。俊成が得意な歌として、

ゆふされば野邊の秋風身にしみてうづらなくなり深草のさと

を擧げたと傳へられる點から見ても、その邊の消息がわかるであらう。西行が自然の中に放浪する事によつてその靜寂の境地を見出して來たのも、それである。美しく咲く櫻の花かげにひそむ靜けさ、寂しさを見出したのが西行であつたと思ふ。而してその幽玄は俊成のよくいふ遠白い即ち壯大といふ感情と、心が細い即ち纖細といふ情趣とを結びつけ、統一した中に見出される精神である。

而してこの精神は、一步進めて考へると、近古文學を流れる傳統的精神や、個人を否定して普遍の中に生きようとする精神と一

致するものがあると思ふ。即ち文學を個性的にそのまゝ表現せず、これを傳統の型の中に入れて、そこからいふしにかけた上で表現するのである。大きな自由の精神を、型といふ窮屈な狭いものの中に入れて、それを凝縮し結晶せしめて、そこから水晶のやうな透明なものを作り出さうとするのである。これは徒然草に見える道といふ事によつてもわかる。「疎かにして慎めるは巧にしてほしいまゝなるに勝る」といふのは、畢竟道は一つの型の中に入れて精煉して始めてすぐれたものとなるかと考へたのである。そこに専門家を敬する心持が出て、型の文學或は道の文學を重んずる心持が生ずる。この型の中に入れることによつて、その小さい我が否定された中から現れて來る大きな自然、こゝに幽玄が現れて來ると思ふ。茶にしても、庭にしても、型

非家  
 専門家ならぬ人  
 世阿彌  
 觀世元清  
 室町時代に能を  
 大成した天才  
 康正元年(二三)  
 政  
 年八十一

の中に入つて、しかも型に捉はれない自由な境地を見出して來るのではあるまいか。それは最も小さいものの中にある最も大いなる生活である。而してこれは室町時代の藝術を代表する能樂に於てもさうである。一つの型の中に入れて、その中に普遍的な人間性をあらはさうとしてゐる。非家では到底味はふことの出來ない境地である。世阿彌のいふ幽玄の精神も、やはりそこにあると思ふ。この幽玄は、近世文學に於ては、更に芭蕉の閑寂の精神ともなつてゐる。芭蕉は自然を深く凝視して、その本質をさびであると思つたのみならず、このさびに徹して、さびを生活の上に見出して來てゐる。高く心をさとりて俗にかへるべしといふのは、生活をさび化し、幽玄化する事であると解せられる。かくの如くにして、自然と人生との窮極であるところ

のさびや幽玄は、又藝術の窮極でもあつたのである。

あるがまゝのものに理念を見出した境地がまことであり、あるがまゝのものの中からあらうとするものを見出して表現したのがもののははれであり、更に自然と人生と藝術とを結びつけて、それをいぶしにかけて、統一せしめ、結晶せしめた大白光の如き境地が幽玄であらう。童のやうな素樸さから華やかな境地となり、そして、さびに達するのである。

かくの如く見るとき、まこと、もののははれと、幽玄とは一見異なつた理念のやうで、しかも本質的な相違ではなく、展開のそれぞれ過程である。まことが童心と素樸との藝術を生み出し、もののははれが心と形との融合調和した藝術を生み出し、更に

幽玄がすべての大きな自然や人生を型の中に入れて、その間から結晶した白光として表さうとする、或點からいへば象徴的な藝術を生み出したかと思ふ。而して、これらの展開流動する精神を統一したもの、そこに國文學の本質が見出されるであらう。

(正代日本文學の研究)

# 中國文教科書 第十終

(略名) 光風吉田國語

中國文教科書 全十冊  
定價各金六拾錢

編者 吉田 彌 平

補訂者 石井 庄 司

發行者 中等學校教科書株式會社

代表者 山本 慶 治

印刷者 (東京二) 大日本印刷株式會社

印刷者 石村 勳

東京都神田區岩本町三番地

中等學校教科書株式會社

日本出版會會員番號 一一七五二二

發 行 所



昭和十八年七月三十一日  
昭和十八年八月三十一日  
昭和十八年九月三十一日  
昭和十八年十月三十一日  
昭和十八年十一月三十一日  
昭和十八年十二月三十一日  
昭和十八年正月三十一日  
昭和十八年二月三十一日  
昭和十八年三月三十一日  
昭和十八年四月三十一日  
昭和十八年五月三十一日  
昭和十八年六月三十一日  
昭和十八年七月三十一日  
昭和十八年八月三十一日  
昭和十八年九月三十一日  
昭和十八年十月三十一日  
昭和十八年十一月三十一日  
昭和十八年十二月三十一日  
訂正四版發行  
訂正三版發行  
訂正二版發行  
訂正一版發行  
初版發行

配給元 日本出版配給株式會社  
東京都神田區淡路町二ノ九

